
オーガゲートキーパーズ CASE 1 MEETING

ダークボーイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オーガゲートキーパーズ CASE 1 MEETING

【Nコード】

N2991A

【作者名】

ダークボーイ

【あらすじ】

近未来、複数都市国家へと変容した日本で次々と起こる超自然犯罪。都市国家の一つ、Mシティにそれらの超自然犯罪に対処するために作られた退魔機関^{アドル}ADDL。これは、闇と戦う者達の記録である……………

α THE NIGHT OF……

オーガゲートキーパーズ

プロローグ

それは、今まで感じた事の無い感覚だった。
それまでおぼろげにしか見えなかった視界が急激的に晴れ渡っていき、それと同時に意識もはつきりしてくる。

（切れやがったか……………？）

そう思いながら周囲を見渡すと、先程までの自分と同じ、虚ろな目をした惚けた表情の男達が思い思いの姿勢でいた。

（オレだけかよ、何が今までの倍の新型だ、くそつたれ）

心の中で悪態を尽きながら立ち上がろうとした時、ふいにまたそれは起きた。

今まで感じた事の無い感覚が、先程とは比べ物にならない程強く彼を襲った。

「な、なん、あああああー！！」

自分の中にある何かが、周りにある何かを取り込み、どんどんと大きくなっていく。そして、それが自分を侵食、いや自分と融合していくその奇怪な感覚に、彼はただ声にもならない声をあげるしかなかった。

そして、変化は訪れた。

「なんだあ、いつちまったか？」

彼の隣にいた男が、焦点の定まらない目で彼の方を覗き込む。肺にあつた全ての空気を絶叫として放出した彼は、荒い呼吸でそれを取り戻しつつ、ゆっくりと男の方を向いた。

「な、何だよ、それ……………」

それを見た男の顔が、ゆっくりと恐怖を含んだ物へと変わっていく。彼はその表情に怒りを覚えた。

（何でオレを見てそんな顔をしやがるんだ、そんなにオレが嫌いなのか？ いや、元々こいつは気に食わなかったんだ）

少しでも男を遠ざけようと、彼が右腕を振るった瞬間、男から表情を作っていた部分が消失した。そして、次の瞬間には顔の上半分を失った男の体が、細かくケイレンしながら、ホコリの溜まった床へと崩れ落ちた。

何が起きたか理解できずに、彼はそれを起こした自分の右腕を見つめた。そこには、赤い血が付いた奇怪な腕が在った。もつとも、その金属の様な光沢を持った刃と、赤茶けた肉とで形作られたそれが腕と呼べるのであれば……………

「う、うわああああ……………!!」

「ひひひひひひ……………!!」

ようやく、それがクスリによる幻覚で無い事に気付いた男達が悲鳴をあげながらもつれる足を必死に前後させながら、彼から逃げ出そうとする。それは、彼の怒りを買っただけの効果しか生まなかった。

彼は無造作に手近にいた男に向けて右腕を振るう。次の瞬間にはその男は胴体の半ばから両断された死体へと変わり果てる。

続けて、反対側に逃げようとしていた男へ向けて左腕を振るう。右腕と同じ奇怪な物へと変貌しつつあったそれは男の体を斜めに切り裂いた。

その時、彼から一番離れた所にいた男がドアまで辿り着き、必死の思いでそれをくぐった。

「逃げるなよ」

ドアの向こう側に逃げようとする男に向けて彼が腕を向けると、突如その腕が伸び、その先が空气中に霞むように消える。が、その腕にはしっかりとした手応えが帰ってくる。

ドアの向こう側から何かが倒れる音が響いてくるのを聞きながら、彼は低い声で笑い始めた。

先程までの感覚は最早無く、体に変貌していく不快感は何故か感じなかった。

ただ、彼は何故か酷く愉快だった

2029年4月9日

今日はクラス替えの発表が有った。みんなは誰かと一緒になった、分かれたと騒いでいた。でも、私にとってはどうでもいい事だ。どうせ、誰も私の言う事なんて信じてくれないのだから……

2029年4月25日

見えてしまった、クラスメイトの里中君が車の中で血塗れになっているのが。感じからいえば、連休中に起こる事だと思う。悩んだ末に、事故には気をつけてただけ伝えておいた。本当の事を言っても信じてくれないか、中学時代みたいに気味悪がられるだけだから。

2029年5月7日

連休中に里中君が交通事故に遭ったという話がクラス中で持ち切りだった。幸い怪我はたいした事がなかったらしい。よかった……

2029年6月18日

今日は進路希望調査があった。白紙で出したら、担任の宗先生に再提出を言い渡された。

どんなに悩んでも、どうせ答えは変わらないのだろうけど……

2029年7月10日

三者面談の日だった。家族のいない私だけが二者面談の形になった。未だに進路を決めていないのはクラスで私と加山君だけらしい。夏休み中に進学が就職かだけでも決めておくように言われた。どうしたらいいんだろう。

2029年7月22日

何故か、行き付けにしている喫茶店で夏休み中にアルバイトをする事になってしまった。

やたらと気さくな女店長さんにすっかり夏休み中に何もする予定が無いと言ってしまったのが原因だった。

特に断る理由も無かった為、引き受けるはめになってしまった。

果たして私に勤まるんだろうか……

2029年7月29日

すごく変わったお客が来た。このお店はペット同伴は許可されているけれど、大きな驚を連れてくるなんて人は初めてだった。

少し背の高い、眼鏡を掛けた優しそうな若い男の人で、店長さんが言うには何でも医大生さんらしい。

けれど、注文を取りに行った時に不思議な物が見えた。今より少

し幼く見えるその人が、暗闇の中で血塗れになりながら何かと戦っているらしい所だった。あれは一体……………

2029年8月3日

またあの人が来た。今日は驚だけでなく、白衣を着た少しくすんだ金髪をした男の人と一緒にだった。

注文を取りに行ったら、いきなりその白衣を着た人に手を取られて口説かれたのは驚いたけれど、それ以上に注文の品を持って行くとして転んだ私を、あの人が片手で支えてくれただけでなく、もう片方の手で宙を飛んでいたトレイを乗っていた飲み物を一滴もこぼさずに受け止めてみせた事にはもつと驚いた。何でも、中国拳法をやっているとかでそういった事が出来るらしい。

それじゃあ、前に見えた物はその修行か何かだったのだろうか。

2029年8月11日

今日、店長さんに卒業後の進路をまだ決めていないと言ったら、それじゃあここで働いてみないかと言われた。

返事はよく考えてみてからにしますと言っておいたけど、果たして彼女は私の力の事を知っても、そう言ってくれるのだろうか……………

……………

2029年8月14日

あれから色々考えてみたけれど、取り敢えず力の事は隠して就職の話は受けてみる事にした。店長さんは喜んでいたが、いつまで力の事を隠しておけるだろうか……………

2029年8月27日

始業式早々、進路指導室に呼び出された。

夏休み中に進路を決めたかどうかの確認だった。一応知り合いの喫茶店に就職の話が有りますと言ったら、それもいいだろうと言わ

れた。

ちなみに、一緒に呼び出された加山君は何と警察のSATに入りたいと言って先生を驚かせたそうだ。けれど、私と入れ違いに出てきた加山君に、少し大人びた彼がSATの制服に身を包んで真剣な顔で銃を構えているのが見えた。

彼は夢を適えられるようだ。見えるのがいつもこんなばかりだったらいだろうに……

2029年9月1日

夏休み明けも土日はバイトをする事になった。しかも今日は店長さんは用があるとかで、午後からは一人で店番をしていたら、またあの人が来た。

しかも今度は2mはあるプロレスラーみたいな男の人と一緒にだった。

その人の事を兄さんと呼んでいたからどうやら二人は兄弟らしいけど、その割にはあまり似ていない。

けれど、その二人が帰る時にまた不思議な物が見えた。同じ深い藍色のジャケットを着た二人が、何かと戦っている所だ。感じから言えば多分3日前の事だろう。一体あの人は何者なのだろう。

2029年9月22日

今まで見た中で一番とんでもない物が見えてしまった。いつも通りに店に来たあの人が帰り際に声を掛けてくれた時に見えたのだが、あの人が私を庇って血塗れになりながら何かと必死に戦っている所だった。

しかも感じから言えば明日それは起きるらしい。この力は今まで一度も外れた事は無かった。一体私はどうすればいいんだろう……

……

α THE NIGHT OF……

「その君、ちょっといいかね」

振り向いた少女の顔が、余りにも脅えていた為、少し戸惑いながらも鳥井巡査長は自分の仕事を始める。

「この時間に一人で何をしているのかね？」

「あ、はい、あ、あのアルバイトで遅くなりまして……」

ともすれば聞き逃しそうな程小さな声で喋る少女を、よく観察しながら鳥井巡査長は仕事を続ける。10年以上も警察官をやっている彼の経験からいえば、ここまで脅えている人物はやましい所があるか、あるいは本当に小心者かどっちかのはずだ。

「済まないけど、IDカードを見せてくれないかな」

「は、はい」

ポケットを幾つかまさぐった後、その中の一つからIDカードを探し出した少女は、震える手でそれを警官に手渡した。

慣れた手つきで鳥井巡査長がそれをリーダーに通すと、短いサーチ音の後に、少女のパーソナルデータがシティのメインコンピュータから送られてくる。

姓名 羽霧^{はぎり} 由花^{ゆか}

性別 女性

生年月日 2011年8月3日

髪色 黒 瞳色 黒

都立Mシティ高校3年在籍

家族構成 無し

次々と送られてくるデータが、目の前の少女と一致するかどうかを確認する。履歴までは確認しようが無いが、ボディデータ位は確認しなくてはならない。

送られてきたデータと同じ色の髪と瞳を確認、ついでに髪型までデータと同じポニーテールになっているので、確認は容易だった。

これが髪型を変えるだけならまだしも、最近は髪だけでなく瞳の色までも簡単に換えられる為、確認に手間取る事も多い。

続いて送られてきた体型も確認。服の上からスリーサイズを確認出来るような特技を彼は持っていなかったが、それでも相手が送られてきたデータと同じ、小柄で随分控えめな体をしている事位は確認出来た。

前科等はまったく無し、ついでに精神病関係の診察歴も無し、これらから完全に通りすがりの小心者の一般人と彼は判断した。

「ここいら辺は最近物騒だよ。何なら家まで送ろうか？」

「い、いえ、結構です」

「あ、ちよつと君！」

いきなり背を向けて走り出した少女を追うべきかどうか彼は悩んだが、先程のデータに有った彼女の住んでいる学園寮が文字通り目と鼻の先に在ったのを思い出し、取り敢えずその背中を見送る事にした。

それに彼女が走っていった方向はさつき自分がパトロールしてきただけのはずだ、別に不審人物は見かけなかったし、大丈夫だろう。彼はそう判断した。

その判断は必ずしも間違いではなかった。

そう、彼女に危害を加えようとするのが普通の人間だったならば。

彼は飢えていた。空腹とはまた違う何かに飢えていた。

この異様な体になって数日が過ぎたが、その間食事らしい食事を取らなくても、別に空腹は感じなかった。

その数日を掛けて、体と能力の使い方を彼は覚えた。

その気になれば普通の人間の姿になれる事、周りの人間から自分を感じさせないように出来る事、それとは逆に自分の周りに人間を近寄れないように出来る事、そしてそれらの力をどう使うかを彼は考えた。

取り敢えず、今はこの飢えを満たす事にした。その異様なまでの血と殺戮への飢えを……

(どうしよう……)

羽霧由花は悩んでいた。

これから自分の身に何かが起きる、その事を知ってしまった。

その何かまでは分からないが、その為にある人が傷付く事も同時に知ってしまった。

その後どうなるかまでは分からない。その人も自分も助かるのか、あるいは死んでしまうのか。

死ぬのは恐くない、と言えば嘘になる。だが、自分の為に誰かが傷付き、死んでいくのだけは避けなくてはならない。

だが、その為に何をすればいいのかは見当もつかない。

今はただ、その悪夢のような未来から逃げるように走り続けるしかなかった。

「あれにするか……………」

彼は飢えを満たす為の獲物に、こちらに近付いてくる少女を選んだ。

女として見ればまだまだだが、それでも楽しい事は無いだろう。

それに、あの少女からは何か不思議な力を感じる。ひょっとしたら自分と同じような力を持っているのかもしれない。

が、それならそれで別の楽しみ方も出来るかもしれない。

そんな事を考えつつ、彼は力を使い、少女と自分の周囲を何者も近寄らないようにした。

これで邪魔者は入らない。ほくそえみながら、彼は獲物の調理に取り掛かる事にした。

その男が現れたのは、由花が寮のすぐ手前の公園に差し掛かった時だった。

薄汚れた服装のその男は、何をするでもなくただ彼女の方をじっと見詰めている。僅かに街灯に照らし出されたその目には、異様な光が宿っているのが見て取れた。

（ひょっとして、この人が……）

男に何か危険な物を感じた由花がとっさに先程の警官の所に戻るうときびすを返した瞬間、男は小さく片手を振った。

「きゃあっ！」

今まで来た方向と反対側に走り出そうとした途端、由花は何か

足を取られ転倒した。

慌てて立ち上がるうとして、いつの間にか履いている靴の片方のヒモが、全て切れている事に気付いた。

「人のところを見ていきなり逃げ出すってのはよくねえな」

男は残忍な笑みを浮かべながら、ゆっくりと由花に近付きながら右腕を振り上げる。

すると、突然由花の履いていたスカートの裾から腰の近くまでが奇麗に切断される。

「！」

切断された場所から覗いている下着を慌てて隠しながら、由花は男の方に脅えた視線を向けた。

男は、顔に浮かんだ笑みを更に深い物へと変えながら更に近付いて来ていた。

「そついった事をするような悪い子にはお仕置きが必要だな」

目前にまで来た男はその歩みを止め、ゆっくりと由花の方へと手を伸ばした。

最早恐怖の為に逃げ出す事はおろか立ち上がる事すら出来なかった由花は、ただ脅え切った視線を男に向けるしかなかった。

「これはっ！」

それを見つけたのは偶然だった。

帰宅途中に、何気に数日前起きたある殺人事件の現場に立ち寄った後の事だった。

その事件は明らかに普通の人間が起こした物ではないと断定され、自分の所属する《組織》の管轄になっていた。

今、目の前に在るのは、そのような事件を起こす犯人が使う能力の一つ《結界》に違いなかった。

それほど上位の結界ではないが、普通の人間ならばこの中で何が起きようが気付く事はおろか、近付く事すら出来ないだろう。たとえそれがどんなに常識を逸脱した事であろうと。

軽く息を吸いながら、指を唇に当て、短く指笛を吹く。上空を飛んでいた一つの影がそれを聞きつけ、そばへと降下してくるのを待ちながら、呼吸を整える。

呼吸を通じて大氣中に満ちる外氣のエネルギーを体内に取り入れ、体内のエネルギーの内氣へと変換しながら巡らせ、臨戦体勢へと体を移行。

「行くぞダイダロス」

上空から降りてきた影、自分の片腕的存在の一羽の大鷲に声を掛けながら、結界の中へと突入する。

中で起きている事を確かめる為に。

最初に響いたのは甲高い猛禽類の泣き声だった。

「ぎゃっ！」

次に響いたのは鈍い男の悲鳴。何故か異常なまでに冷たい手で由花の服に手を掛けていた男が、その悲鳴と共に手を離した。

「こんな所で何をしているんです？」

穏やかな、それでいて強い意志を感じさせる口調の若い男の声が由花の耳に届いた。

彼女はその声の持ち主を知っていた。その人物がこの場に来る事も。

「てめえ、どうやってここに！」

「それはこっちのセリフですよ。結界を張ってまで女性に危害を加えるような事は感心出来ませんね」

口調はそのままに、彼は応える。

彼の掛けている眼鏡の奥の瞳には、由花の見た事の無い鋭い光が宿っていた。

「生憎と人に感心されるような事はやった事が無いんでね」

最初にダイダロスの鉤爪で切り裂かれた首筋に片手を当てながら、男がゆつくりと彼の方に向き直る。

その顔には、またあの笑みが浮かびつつあった。

「それに、どうすれば他人が感心してくれるかなんて知らないもんでね」

「そうですね、今すぐ彼女から離れてくれれば、少しは感心されるんじゃないですか」

「そいつは出来ねえ話だな」

男は、首筋に当てていた片手をゆつくりと降ろしながら、唇の片端を釣り上げ、その顔をより残忍な笑みへと変える。

それは、由花から離れる意志が全く無い事の証明でもあった。

「それでは、こちらで離れさせてもらう事にしましょうか」

最後のか、の音が消えるかどうかのタイミングで、彼の姿が由花の視界から消えた。それから由花には同時としか感じられないような極僅かなタイムラグを置いて、彼女のすぐ側から複数の音が響く。地面を強く踏みしめる音、短く鋭い呼気の音、そして鈍い打撃音。それらが一緒に聞こえてきた方向へと由花が顔を向けると、ついさつきまでそこにいたはずの男の姿は無く、代わりに彼が右の手の平を前に突き出した姿勢でそこに立っていた。

「怪我は有りませんか？」

突き出した右手を降ろし、由花の方に向き直りながら、彼は由花が見慣れた優しい笑みを浮かべる。

よく見ると、彼が今まで向いていた方向から5m程離れた所に男は倒れていた。

彼が中国拳法を使えると言っていた事と、その技を使って男を攻撃したらしい事に由花はようやく気付いた。

が、彼のその笑顔に由花は安堵ではなく、不安を覚えた。彼にこれから何が起るかを知っていたが為に。

「……て……」

「え？」

「逃げてください！」

由花の声と、上空を旋回していた大鷲―ダイダロスが甲高い泣き声を上げたのはほぼ同時だった。

それを聞いた彼の表情が笑みから怪訝、そして緊迫した表情へと

瞬く間に変わる。

最後の緊迫した表情へと変わると同時に、彼は由花を抱き抱え水平方向へと跳んだ。

空中で器用に前後を変えながら、最初に彼が立っていたのと同様同じ場所に着陸すると同時に、彼は自分の背後へと由花を匿う。

その背中はいつの間にか切り裂かれ、血が流れ出していた。

「やるじゃねえか、にいちゃんよお……」

腰から上だけを起き上がらせ、何故か右腕を横に広げていた男が、さも愉快そうに、それでいて侮蔑と皮肉を込めた笑みで二人を見つめながら立ち上がった。

「オレもちよつと本氣つて奴にならせてもらっぜ」

突然、肩まで持ち上げていた男の右腕が膨れ上がる。

着ていた上着の袖を内側から弾け飛ばし、男の腕は赤茶けた肉と公園の街灯を受けて鈍く光る金属質の刃を兼ね備えた、奇怪な物へと変わっていく。

変化は右腕だけでは留まらず、急激的に全身へと及んだ。

右腕と同じように、左腕も奇怪な刃を持った物へと変じ、体は腕と同じ、赤茶けた不気味に蠢く肉塊へと成り果てる。

下半身もまた衣服を弾き飛ばしながら軟体生物を思わせる短い触手の生えたまるで丸太のような太い足へと変わり、髪と背中が融合しながら腕と同じような刃を持った細い触手へと変わり果てる。

肩と首から盛り上がった肉が頭を飲み込みながら、より高い位置へと男の顔を運んだ。

不思議と顔だけは他の部分と同じ赤茶けた色に変わりながらも、その不気味な笑みを浮かべた表情そのままだった。

「！」

人が人でなくなっていく、その様を見た由花は声にならない悲鳴を上げた。

何かが起こるという事は分かっていたが、ここまで非現実的な事が起こるとは思ってもいなかった。

「ヒューマンベース……………」

目前にいる彼がそう呟くのが由花の耳に届いた。

手早く彼ははめていた腕時計のボタンを押す。赤い点滅表示を始めたそれを口元に寄せると、それに向けて先程とは打って変わった鋭い声で喋り始めた。

「こちらイーグル・オブ・ウインド、H-17エリアにてヒューマンベースと遭遇。これより交戦に入る。なお、現場には民間人が1名、至急増援を」

『了解』

腕時計からの返事を聞きながら、彼は掛けていた眼鏡を外す。

その眼差しが今まで見た事の無い鋭く冷たい物へと、そして右の瞳が蒼く輝く物へと変わっていくのを由花は見てしまった。

『緊急シグナルを受信！ H-17エリアにてイーグル・オブ・ウインドがヒューマンベースと遭遇、交戦状態に突入した模様！ 現場には民間人1名がいるとの報告ですが、結界が張られている為、上空衛星からの詳細確認は不可能！』

「Cクラス戦闘態勢を発令。バトルスタッフ全員にスクランブルを」

「サポートマシン全部のエンジン掛ける！ 兵装の確認急げ！ モ
タモタすんな！」

「相手はこの間のやつの犯人か？」

「まだ不明だ。今、空が相手している」

「また獲物一人占めしてねえだろうな」

「そういう問題じゃないでしょ！」

『デュポン発進可能臨界まであと6分』

「スレイプニルでG-17エリアのゲートから向かった方が速いな。
先に出動しろ、民間人の保護を最優先だ」

「相手ぶちのめしやいいんだろうが」

「だからそういう問題じゃないでしょ！」

「もう行っちゃいましたけど………」

「ゲート開け！ 周りにいる連中は待避しろ！」

『デュポン発進可能臨界に到達！』

「発進」

「急々如律令、勅！」

彼が懐から取り出した四角い紙切れ―道教で使われる呪符と呼ば
れる物―が一直線に怪物へと変化した男へと飛んでいき、普段とは
まるで違う冷静な口調で呪文―こちらは口訣くけつと呼ばれる―を唱えら
れ、それは突然雷へと変化する。

「ぐがあっ！」

それを食らった男―怪物が、軋んだ響きを持った悲鳴を上げなが
らも、刃と化した腕を彼へと振るう。

彼はその刃を巧みに避けながら、懐から今度はワイヤーの両端に

大きさの違う二つの四角錐を組み合わせた形の刃の付いた武器――双縄標じようひょうという名の古代中国の武器――を取り出すとそれを相手へと向けて投じた。

二つ並んで飛ぶ刃が相手に当たる瞬間、彼は手元のワイヤーを微かに引く。途端に刃はそれぞれ左右に弧を描き、相手の両脇へと突き刺さる。

「痛えじゃねえか！」

突き刺さった刃を物ともせず、男は怪物が刃の生えた無数の触手となった髪を振るう。

彼はワイヤーを掴んでいない方の手で懷からもう一つ双縄標を取り出すと、それを指の間に挟み、襲ってくる刃の髪のある物は切り落とし、ある物はかわす。

それでも幾つかの刃が彼の体をかすめ、筋のような傷を彼の体に刻んだ。

今、目の前で繰り広げられている戦いは現実の物なのだろうか、由花はそんな思いに捕らわれていた。

先程から起きている事全てが余りにも自分の知りうる限りの常識から逸脱しすぎている。

が、あらかじめ知っていた様に彼が傷付いていく様子が、嫌でもそれが現実なのだという事を彼女に知らしめていた。

（これ以上、一体何が起きるんだろう……）

そう思った途端に、それは来た。

今見ているのとは別に、もう一つの視界が開けていく。

それは、今まで起きた事、もしくはこれから起こる事を映し出す

彼女自身にしか見えない時を超えたビジョン。

見えたのは男〃怪物が突然消え、腕だけが彼を襲う映像だった。

「ハッ！」

彼は呼気と共に、最初に放った物とは比べ物にならない程強力な掌底打を男〃怪物の腹部（だった部分）へと放つ。

マンホールのフタより一回り程小さく（それでも普通の人間の胴体程の幅はあったが）腹部（だった部分）を陥没させながら男〃怪物が後方へと吹っ飛ぶ。

「がふっ、てめえ、ころ、ぎゃああ！」

血反吐を吐きながらも、何とか転ばずに踏み止まった男〃怪物の顔面に上空にいたダイダロスが鉤爪を振るう。

悲鳴を上げながらも、男〃怪物が離れようとするダイダロスに腕と刃の髪を振るうが、ダイダロスは地面スレスレを飛びながら巧みに刃の隙間を掻い潜り、再び上空へと舞い上がる。

「ひ、ひへへへへへ…」

突然、男〃怪物が先程までの激昂した表情から、打って変わって静かな笑いを浮かべ始めた。

彼はそれを怪訝そうに見つめながら、片手で相手に突き刺さったままの双縄標のワイヤーを手繰り寄せ、もう片方の手で懐から呪符を取り出しながら油断無く構える。

「やっぱりよ……疲れるからって、出し惜しみするのはよくねえよな！」

男「怪物は喋りながらも両腕を持ち上げ、突然それを思い切り振り下ろした。

自分自身の体を狙って。

「え？」

「！？」

傷口から人と変わらない赤い鮮血を滴らせながら、男「怪物は笑みを浮かべる。その足元に、周辺の組織ごと切り落とした双縄&mp;#37858;の刃が落ちる。

「奥の手つてのを使わせてもらうぜ」

そう言うや否や、突然男「怪物の姿が掻き消える。

「何だ……？」

地面に落ちた双縄標を手元に戻しながら、彼は周囲を見渡す。
蒼く輝く右の瞳―浄眼と呼ばれる魔を見透かす力を持った目―が周囲のあらゆる物を見通すが、それを持ってしても相手の姿は捉えられなかった。

『ぶつ殺してやるぜ！ てめえも、あのクソ鳥も、その女もまとめてぶつ殺してやる！』

「危ない！」

どこから、男「怪物の声だけが響いてきた途端、突然彼の背後に刃の腕だけが現れる。

彼は由花の声が聞こえると同時に、とっさに前に跳んでいた為に、

辛くもその腕からの一撃を逃れたが、その跳んだ先に別の腕が現れる。

「急きゆう…」

彼は身をよじりながら持っていた呪符を突き出すが、口訣を唱えるよりも速く、その腕が彼の胸を掠めながら呪符を両断する。

切り裂かれた胸から血を滴らせながら、素早くその場から動こうとした彼の今度は足元から無数の刃の髪が現れる。

「くっ！」

彼は慌てて上へと跳び上がるが、足に絡みつこうとしていた刃の髪の内何本かが彼の足を切り裂く。

助走も無しに数m程もジャンプした彼は、ちょうど真上を飛んでいたダイダロスの足を掴むと、下降しながらグライダーのように滑空し、離れた所に着地する。

「どうしたい、あんちゃんよ。逃げてばかりかい？」

背後から聞こえてきた声に彼が振り向くと、そこに男「怪物の不気味な笑みを浮かべた顔が浮かんでいた。

振り向く勢いをそのままに、その顔へと放った彼の回し蹴りが命中する瞬間、その顔は虚空へと消えた。

「そんなに離れてていいのかい？」

その声が響くと同時に、今度は由花の目の前に全身で現れ、片腕を振るって彼女の上着だけを切り裂いた。

「きゃああああ！」

由花が悲鳴を上げながら、切り裂かれた上着の隙間から覗いている下着を慌てて隠しながらその場にしゃがみ込む。

それを満足そうに見下ろしながら、男「怪物が彼の方を見ようとした途端、その周囲に八つの刃が突き刺さる。

「何っ！」

ちょうど男「怪物を中心とした八角形の頂点の位置に双縄標は突き刺さり、対角線を結ぶワイヤーが檻のように男を囲む。その刃には一枚ずつ呪符が貫かれていた。

「我、八門の法を持ちて遁行と成し、杜門へと汝を導く！」

「しまっ……」

男「怪物が逃げるよりも一瞬速く、彼の口訣が終わり、術が発動する。

八枚の呪符が光り、それぞれの位置から光で形成された扉が現れる。その内の一つ、男「怪物から見て右側の扉が開いた。

すると、その呪符で囲まれた内部が無数の透明な直線で切り刻まれたように歪む。

「ぎゃああああ！」

無数の透明な直線で歪んだ空間の中から、その直線によって切り刻まれた男「怪物の絶叫が響いた。

が、光の扉と共に歪みが晴れた後のその場所には、血溜まりと無数の肉片が散らばっていたが、肝心の相手の姿は消えていた。

『ひ、ひへへ、油断したぜ……やっぱりお楽しみは取っておいた方がいいみてえだな……まずはてめえからぶっ殺す!』

またしても声だけが響いてきたと思った途端、それぞれ違う場所から血塗れの腕とほとんど傷を負っていない腕、そして無数の刃の髪が彼を襲った。

刃の髪を手にした双縄標で切り落としながらかわし、傷を負っていない腕はダイダロスの攻撃によってその起動を逸らす。が、血塗れの腕だけは防ぐ事もかわす事も適わず、彼の体に新たな傷を刻む。

(どうしよう………)

羞恥よりも、恐怖の為にうずくまりながら、由花は、目の前の戦いを呆然と見ていた。

フィクションの世界でしか戦いという物を知らない彼女の目から見ても、彼が劣勢なのは分かった。

相手は何も無い所から突然現れ、攻撃してきたと思えば、またすぐに消える。その内の何回かに一回は彼の体に傷を刻む。

そして、次に攻撃がどこから来るのか彼は知る事が出来ない……

……

そこまで考えた時に気付いた。

自分ならば次に何が起こるかを知らる事が出来るという事に。

(でも………)

由花の心に迷いが生まれる。自分の意志で力を使った事は今まで一度も無い。

そして、もし使えば彼にそんな力が在る事を知られる事になる。そうしたら、彼は今まで通りに自分に優しくしてくれるだろうか

……
が、その迷いも彼の体に新たな傷が刻まれると同時に消えた。
恐怖と焦りに彩られた心を奮い立たせ、強く願う。未来が見たい
と。

そして、彼女にとっては見慣れたもう一つの視界が広がってくる。
生まれて初めて、由花は自分の意志で能力を発動させた。

「来ます！ 右後ろ！」

由花の声と同時に、彼は左へと跳ぶ。

その脇を彼を襲い損ねた刃の髪が空しく通り過ぎ、再び虚空へと
消える。

「次は正面！ 下の方から！」

彼女の言葉より一瞬遅れて、彼の足元から血塗れの腕が飛び出す。
その事に多少怪訝な表情を浮かべながらも、彼は真上へと大きく跳
んだ。

「真後ろ！ 背中に向けてまっすぐ！」

その声に反応した彼が虚空へと向けて右足を蹴り上げ、その反動
を利用して空中で倒立する。そして、その下を通り過ぎようとする
腕に懐から取り出した呪符を指先で突き刺した。

『何いつ！』

「爆気を持ちて在を禁ず！」

腕が虚空に消えるよりも速く、突き刺された呪符が爆発し、肉片

を撒き散らしながら腕を大きくえぐる。

「次は地面に降りてから、前と左右同時に来ます！」

由花の言葉通りの攻撃に対し、彼は正面から襲ってきた腕を斜め前に進みながら真横への掌底でその軌道を逸らしながらかわし、そのまま体を反転させて虚空に消えかかっている腕の根元に肘を打ち込む。

右から襲ってきた腕にはダイダロスが鉤爪でそれを大きく切り裂き、左から襲ってきた刃の髪が彼らを狙って大きく広がるが果たせず消える。

「女、てめえまさか！」

「次は…え？」

次の指示を出そうとした由花のもう一つの視界に映ったのは、驚きと焦りを浮かべながらこちらに向かおうとする彼の姿。

その頭上に、鈍く光る刃の腕が出現している事に彼女は気付いてなかった。

「死ねえええ！」

「アーメン！」

声と共にその刃が振り下ろされると同時に、力強い女性の声と、鈍い破裂音のような音が響いた

それは、由花が生まれて初めて聞いた本物の銃声だった。

一体何が起きたのか由花が理解するよりも速く、その体を彼が抱き抱えその場を飛び退く。

「怪我は無いか」

「あ、はい……」

冷静な口調のまま彼から掛けられた声に返事をしながら地面に降ろされた時に、ようやく何時の間にかその場に現れた、変わったバイクに跨って銃を構えている女性がいる事に気付いた。

「苦戦してるみてえだな」

「ああ、気を付けろ、奴は空間を渡るぞ」

「そうかい」

軽口を叩きながら、その女性は先程まで由花がいた場所（正確にはその真上）に向けていた銃口を突然自分の真後ろに向けてトリガーを引いた。

『ぐあつ！』

発射された弾丸は、ちょうど女性の真後ろに出現した腕へと突き刺さる。奇怪な悲鳴を残しながら、その腕はまた虚空へと消えた。

「一人でスルみてえにコソコソするのが得意って訳か」

銃を構え直しながら、女性はバイクのロットルを捻る。内燃機関ともモーターとも違う変わったエンジン音を立てながら、凄い勢いで車体をドリフトさせてバイクは彼と由花の隣へと並んだ。

隣にきた女性を由花は改めて観察した。

深い藍色で半袖のジャケットと、両脇に大胆過ぎるスリットの入った同色のスカートを履き、黒いボディースーツをその下に着込んだ、腰まである長い黒髪を垂らした20代位の女性だった。

腰のベルトにはホルスターとスペアマガジン、そして幾つかのパウチと特殊警棒の様な物がぶら下がっている。そして、着ている服

の上からでも分かる豊満な胸に、古びたロザリオが揺れていた。女性の跨っているバイクもまた変わっている物で、黒地に赤のラインが入ったボディに、両脇に大きなサイドカーが付いている。サイドカーの右側には長い砲身が、左側には四角いミサイルポッドの様な物が付いているまるでSF映画にでも出てきそうなごつい戦闘用バイクである。

『デュポン到着まであと3分15秒！ それまで持ち堪えろ！』
「持ち堪える？ 逃がすなの間違いじゃねえのか？」

バイクのメーター類の中にあるディスプレイからの報告を聞きながら、その顔に楽しげな笑みを浮かべ、女性がホルスターに銃を戻しながらバイクから飛び降りる。

「油断はするな。手強いぞ」
「てめえ見りやそれくらいは分かるよ」

取り出した呪符を構えながらの彼からの警告に応えながら、女性の顔が真剣な物へと変わる。

「主よ、我に邪悪なる魂戒めん為の力を与えん事を」

女性が聖句を唱えながら十字を切り、周囲を油断無く見渡す。
彼もまた油断無く構えながら周囲を見渡すが、相手の姿は見当たらない。

『仲間がいやがったのか！ そいつもまとめてぶつ殺してやる！』
「天空に在りし大天使ミカエルよ！ その御手に掲げし盾を持ちて我らを守らん事を！」

男「怪物の言葉が終わるよりも速く、女性が聖句を唱えながら右の方を向いて両手を前に突き出す。

ちょうどその方向から現れた無数の刃の髪が、女性の目の前に現れた淡く光る障壁に阻まれる。

『なんだとっ！』

驚愕の声が響く中、彼が構えていた呪符を刃の髪の中に投げ、口訣を唱える。

「雷気、火気を持ちて在を禁ず！ 急々如律令！」

『く、ぐあっ！』

光の障壁に阻まれた刃の髪が虚空に消えるよりも速く、投げ込まれた2枚の呪符が雷と炎に変わり、その大部分を千切り飛ばす。

『くそたれええええ！！！！』

「危ねえ！」

女性が叫びながらその場に屈み込み、それを聞いた彼が由花を抱えて何も無い横手へと跳ぶ。

ちょうど先程まで由花がいた空間の後ろから突き出された血塗れの腕が、女性の上を通り過ぎようとした瞬間、突然立ち上がった女性がその腕を両腕で掴み、捻りを加えて肩に担いだ。

「おらあっ！」

気合いと共に、突き出された勢いを利用して女性はその腕を思いっきり引いた。関節を極めた柔術式の投げ技が見事に決まる。

投げられた勢いで、腕に続く体が虚空から引きずり出され、地面

へと叩き付けられた。

「がはっ！」

何が起きたか理解できずにいる男。怪物の視界に、上空から迫ってくる影が映った。それが何かを認識する間も無く、視界の半分が激痛と共に閉ざされる。

上空から隙を伺っていたダイダロスが、男。怪物が地面に叩き付けられると同時に、急降下してその右目にくちばしを突き刺したのだった。

「ぎいやああああああ！！！」

悲鳴を上げながら、男。怪物が目茶苦茶に手足を振り回す。振り回した右腕がその場を離れようとしていたダイダロスをかすめ、左腕が女性の左肩へと当たり、その体を弾き飛ばす。

「ぐっ！」

『瑠璃香！』

弾き飛ばされた勢いで、女性が止まっていたバイクへとしたたかに体を打ち付けた。バイクのディスプレイから女性の名前らしき物を叫ぶ声が響く。

「ちっ、油断したぜ……」

その声に応えず、女性――瑠璃香という名らしい――が立ち上がりながら、肩を押さえて顔をしかめる。

『あと1分以内にデュポンが到着する。それまで……』

「その前にぶっ倒す!!」

叫びながら、瑠璃香がホルスターから一瞬にして銃を抜き、未だに暴れている男に怪物へと次々と弾丸を叩き込んだ。

『やつぱりこうなるのか……………』

諦めたような声と共に、バイクからも次々と小型ミサイルが発射される。

「ぎい……」

小型ミサイルの爆発音に、男に怪物の悲鳴がかき消される。それでもなお、その爆音の中にミサイルと弾丸が叩き込まれ、弾丸が尽きた所でようやく攻撃の手が止まる。

「倒した……………?」

「いや……………」

爆炎が晴れ、焦げた肉片が転がっているのを見て由花が呟いた言葉を、傷付いたダイダロスを腕に止まらせながら彼が否定する。

瑠璃香の方も手早くマガジンを交換しながら、周囲を警戒していた。

『そうか…分かったぞ……………てめえもその女みてえに、オレのしようつとする事が分かるんだな』

「てめえ、も?」

虚空から聞こえてきた声に、瑠璃香が疑問符を浮かべ、その視線が由花へと向けられる。

「ひよつとして、そいつ…」

『これならどうだ!』

疑問を言い終えるより速く、瑠璃香の前から焦げてだいぶ少なくなった刃の髪が、左右の斜め後ろから刃のあちこちが欠け落ちた腕が極至近距離から突き出された。

「ちっ!」

瑠璃香が舌打ちしながら、とつさに横へと転がる。避け切れなかった刃が彼女を掠めるが、ジャケットとボディースーツの表面に僅かに傷を残しただけに終わる。

「しぶてえんだよ!」

転がった状態から片膝をついて立ち止まった瑠璃香が、消えようとする腕へと向けてトリガーを引くが、肩の痛みの為に狙いが逸れ、向こう側に有ったベンチへと当たる。

『ハズレだ!』

嘲笑が虚空から響いた。

(不死身の…怪物………)

そんな言葉が由花の頭に浮かんだ、

あれだけの攻撃をくらいながら、男!!怪物は未だに生きている。

彼女の知識では、あれ程の攻撃を食らって生きていられるような生

物は存在しない。

それ以前に、変身したり突然消えたり現れたり出来るような物が生物であるかどうかすら疑わしい。

（ひょっとして、このままみんな……………）

「…が分かるか」

段々と暗黒方面へと移っていく由花の思考が、彼の言葉で中断される。

「え…？」

「相手の動きが分かるか？」

虚空を鋭い目で見ていた彼の言葉が、自分に対する質問である事に由花はようやく気付いた。

「……………はい……………」

「もうじき仲間が到着する。それまでの間、手伝ってほしい」

「……………分かりました……………」

ためらいながらの由花の返事に、彼が冷静な口調のまま言葉を続ける。

明らかに自分の能力を言っている事に、由花は戸惑いを感じながらも了承する。

「頼む」

彼は短くそう言いながら、腕に止まっていたダイダロスを飛立たせ、前へと走り出した。

「前から来ます！」

「八門の法にて基^そを拒む！」

彼が口訣を唱えると同時に呪符を前へと突き出す。

すると、呪符は光で形成された扉へと変わり、ちょうど彼の前に出現した腕を受け止める。

「次は右から！」

「ハレルヤ！」

彼が右を向くのと、虚空からの腕の出現、そして瑠璃香が聖句と共に弾丸を撃ち込むのはほぼ同時だった。

『ぐがあっ！』

聖句と共に撃ち込まれた弾丸が腕を大きくえぐり、血と炭化した肉片を撒き散らしながら腕は虚空へと消えた。

「またかこのメスガキが！」

「えっ？」

真後ろから突然聞こえてきた声に由花が振り向くと、そこには半面を血に染めた顔が浮かんでいた。

「てめえから死ね！」

叫びながら男は怪物が両腕を由花へと振り下ろす。

そこへダイダロスが甲高く泣きながら由花へと飛び掛かってその体を押し倒した。

振り下ろされた刃は空中に残っていたダイダロスの羽の1枚を切

っただけに終わった。

「この…」

「我が守護天使ハナエルよ！ 汝が御手に掲げし聖銃の雷火我が前に撃ち放たん事を！」

「春気を持ちて雷氣と成し、雷氣を持ちて汝が在を禁ず！ 急々如律令！」

男Ⅱ怪物の悪態を二つの呪文が遮る。

それに男Ⅱ怪物が気付いた時には、大きなプラズマの塊と呪符から変じた雷が回避不可能な距離にまで迫っていた。

「！」

悲鳴は盛大なスパーク音と肉が弾け飛ぶ音にかき消され、弾け飛んだ腕の刃が風切り音を立てながら宙を舞い、地面へと突き刺さる。肉の焦げた匂いと電子臭の入り交じった煙が晴れていくと、そこには無残な姿となった男Ⅱ怪物の姿が在った。

とつさに防御したらしく両腕を顔の前で交差せていたが、右腕は途中から消失し、左腕はほとんどが炭化していた。

右腕が消失した為か、顔の半分は無残に焼け爛れ、虚空に潜んでいた部分からラインを引いたように前だけが著しく傷付いていた。

「……まだまだ……」

腕を降ろしつつ、煙の混じった息を吐きながら男Ⅱ怪物は呻いた。

「まだだ——！！！！」

叫びながら最早ほとんど炭化している腕を一番手近にいた由花へ

と振り下ろそうとした時、突然周囲が光に照らし出された。

驚いた由花が上空を見上げると、そこに巨大な機影が在った。

余りの大きさに全体のシルエツトすら把握できないようなその巨大な機影から、強力なサーチライトが公園一帯を照らし出している。それだけ巨大な物が空中に静止しているにも関わらず、驚くべき事にその機影からは駆動音のような物はほとんどせず、それだけ目立つ物にも関わらず周囲の人家が気付いた様子も無かった。

「な、なんだあれは……………」

攻撃する事すら忘れ、男は怪物も呆然とその機影を見つめていた。すると、その機影のハッチが開き、そこから何かが投下される。ドラム缶を一回り大きくしたようなそれは、空中で四つに分かれ、公園の東西南北の四方に突き刺さる。

ちょうどガスボンベ位の大きさの四つの楔と化したその表面のカバースライドし、中から円周状に梵字が浮き出た胴体が現れる。

『オン』

四つの楔から同時に低い男性の声が漏れる。

それと同時に、楔の表面が低い唸り音と共に回転を始める。

『オン アボギヤ ベイロシャノウ マカ ボダラ マニ ハンド
マ ジンバラ ハラバリタヤウン！』

声が古代インド語の呪文―密教、陰陽道などで使われる真言と呼ばれる物―を朗々と唱える。

それと同時に楔の表面も回転速度を増しながら徐々に光り始め、声が最後の一句を唱え終わると同時に一瞬だけ閃光を発する。

途端に楔で囲まれた周囲の景色がまるで水面に写った景色の様に

揺らぎ始める。

「こいつは！」

『最早逃げ場は無い』

男「怪物の驚愕の声を、上から聞こえてきた真言を唱えていたのと同じ声が遮る。冷静その物の声は更に言葉を続けた。

『もしお前が罪を悔い改め、おとなしくするというのなら、それなりの対処を約束しよう。だが、これいじょ……』

「う・る・せ・え！」

最後まで聞かず、男「怪物は由花へと向けて刃の髪を伸ばす。

恐怖の為に目をつむった由花の耳に、刃の髪が何かに突き刺さる鈍い音が響いた。

恐る恐る目を開いた彼女が見たのは、地面から生えた無数の杭のような物だった。

よく見ると、それは地面その物が無数の杭となって由花を守ったのだった。

「レディに乱暴するなんて最低ね」

突然澄んだ女性の声が響く。

由花がそちらを向くと、そこに緩やかなウェーブの掛かった金髪の女性が宙に浮かんでいた。

驚いた由花が目凝らして見ても、瑠璃香と似たような格好を（もつとも、長袖とタイトスカートという違いがあったが）したその女性が、何らかの機械を使って飛んでいる様子は全く無い。

「てめえの仕業か！」

叫びながら男Ⅱ怪物が腕を突き出す。

その先端が虚空へと消え、金髪の女性の目前へと出現するが、彼女のほんの数cm手前でそれは止まる。

よく見ると、彼女の髪が前へとなびき、それは前へ行けば行くほど強風にあおられたように強くなびている。

そして、耳を澄ますと確かに大きな風音が聞こえるが、由花の周囲には音を立てる程の風は吹いていなかった。

「むだよ」

金髪の女性がそう言うと同時に、凄まじく強力な突風が男Ⅱ怪物にだけ吹き付け、その体を弾き飛ばした。

「がつ！」

弾き飛ばされた男Ⅱ怪物の体は楔が形成した結界に当たり、地面へとずり落ちた。

「観念する事だ」

彼が呪符と双縄標を構えながら言う。

「神の御許に送ってやるよ」

瑠璃香が十字を切りながら銃を構える。

「これ以上、罪も無い人々を傷付けるなら容赦はしないわ」

金髪の女性がそう言いながら由花の側へと降り立つ。その周囲の

地面がざわめき、風が渦巻いている。

「殺れるものなら殺ってみやがれ！」

男「怪物の姿がかき消え、楔の一つの側に現れると、それを破壊するべくありつただけの攻撃を加える。

が、予想以上に頑丈なそれは、多少表面が削れる程度でその働きを止める事は無かった。

「勅！」

「アーメン！」

楔を攻撃し続ける男「怪物に向けて、呪符が突き刺さった双縄標が、聖句と共に放たれた弾丸が、風の刃と大地の槍が放たれる。

それを背後に感じた男「怪物の焼け残った顔に、笑みが浮かんだ事に気付いた者はいなかった。

攻撃が当たる瞬間、男「怪物の姿がまたしても虚空へと消え、攻撃はそのまま背後の楔へと向かった。

「くっ！」

彼がとっさに手元のワイヤーを引く。双縄標は楔の手前で止まった。

「しまっ……！」

金髪の女性が放った力を慌てて消去する。

風の刃と大地の槍は楔の表面を軽く傷付けるだけに終わった。

「やば………」

放たれた弾丸だけは止めようが無く、楔に大穴を穿った。

楔はそれでも回転を続けようとしたが、ゆっくりと回転は遅くなり、やがて止まった。

途端に揺らいでいた景色が元に戻り、結界が消えた事をいやでも知らしめた。

「覚えてやがれ！ お前ら皆殺しにしてやる！」

半面しか残っていない顔だけを虚空に出し、男「怪物はそう言い放つと再び虚空へと消える。

『半径200m範囲内に反応は無い。どうやら本気で逃げたようだな』

上から聞こえてきた報告に、しばらく用心深く構えていた彼らがようやく緊張を解いた。

『現場の処理及びサンプルの回収の後、総員撤収する』

彼が無言で双縄標を手元に戻し、あちこち切り裂けている上着の隠しポケットへと仕舞う。その肩に傷付いたダイダロスが止まった。

「くそっ！」

悪態を尽きながら瑠璃香が銃をホルスターに戻し、バイクを殴り付ける。

『八つ当たりするなよ……………』

バイクのディスプレイに呆れた顔の男性が映っている。

「大丈夫？ 変な事とかされなかった？」

金髪の女性が自分の着ているジャケットを由花に架けながら心配そうに聞いてくる。

その時になって、由花はようやく今の自分の格好を思い出し、酷く赤面した。

『総員、撤収する』

β ADD L MEMBERS

β ADD L MEMBERS

カチリ、と小さな音を立ててアナログ式の腕時計が夜中の11時を指した。

それを見ながら、由花は不安げにため息を尽いた。

あれから、彼らに連れられて不思議な形をした飛行機（間近で見たそれは、前にテレビで見たかなり昔に製作された国際レスキュー隊を描いた人形劇に出てきた物に似ていた）に乗せられ、ここに来たのは1時間位前の事だった。

飛行機から降りた彼女が見たのは、文字通りの秘密基地だった。

見た事の無いような乗り物や機械が立ち並ぶ格納庫から、素人目にも分かるような嚴重なセキュリティの敷かれたまるでSF映画にでも出てきそうなメカニックな通路を通り、途中でボロボロになった服を着替え、（一緒にいた宙を浮かんでいた金髪の女性が自分と同じサイズの服が似合う事を何故か妙に喜んでいたが）この部屋で待っているように言われてから大分時間が過ぎた。

通された部屋は、中央に大きなテーブルとその両側にソファアが置かれている以外は、装飾品一つ無い妙に殺風景な部屋で、唯一壁に埋め込まれている大型のディスプレイが部屋を飾っていた。

一応テーブルの上にディスプレイの物と思われるリモコンが置いてあったが、何かを見る気にもなれず、ただまんじりと時間だけが過ぎていった。

ソファアに座ったまま、また時間を確認しようとした時、入り口の自動ドアが音を立てて開き、二人の人物が部屋へと入ってきた。

一人は前にバイト先のお店に来た事がある、確か彼が兄さんと呼んでいた20代中盤位の男性だった。

2 m 近くある身長にプロレスラーの様な筋肉質の体を何故か白衣で包み、首から妙にメカニックでこついゴーグルを掛けている。その後ろから入ってきたのは、あの金髪の女性で、私服に着替えて湯気を立てている三つのカップを乗せたトレイを持っていた。

「あ、あの…！」

「まず落ち着く事だ」

ソファから立ち上がった由花をまた座るように促しながら、男性が向かいのソファに座る。

「お互い聞きたい事は色々と在るが、一度にそれに応える事は不可能だ。そこでお互い一つづつ交代に質問し、それに答える形にした。いいか？」

「…はい……」

落ち着き払った男性の声に気圧される形で、由花は再びソファへと座り直す。

その前に女性が香ばしい香りを立てるコーヒーマグの入ったカップを置き、男性の前へも置くと、その隣に一つだけあった紅茶を取ると、男性の隣へと腰掛ける。

由花は改めて目の前に腰掛けている男女を観察した。

男性の方はよく見れば確かに彼にどこことなく似ているようだが、彼が普段優しい顔をしているのに比べ、目の前の男性は落ち着き払った冷静その物の顔をしている。

筋肉質な体に比べ、その顔には粗暴さの欠片も無く、どこかしら知性の感じられる瞳をし、一見アンバランスのようなそれらが一体となって、ある種独特な雰囲気醸し出していた。

女性の方は室内灯の下でもくすみを見せない程の鮮やかな色合いと、天然らしい緩やかなウェーブの掛かった金髪を持ち、澄み切っ

た空のような澄んだ碧眼をしている。

こちらに向けて穏やかに微笑んでいるその姿は、童話の中の妖精のような幻想的な雰囲気はどこか漂わせていた。

「まず、お互い自己紹介を済ませておこうか。

オレの名前は守門^{もりかど} 陸^{りく}、職業は一応科学者という事になっている」
「科学者さん、ですか？」

由花が今まで漠然と浮かべていた科学者のイメージを目の前にいる人物と重ねてみる。

確かに白衣を着て、どこか知的な顔はしているが、その異常に遅い体から発する雰囲気は、彼女のイメージする「暗い実験室で黙々と研究に勤しむ科学者」とはとても重ならない。

「信じていないみたいだな」

「あ、そんな事は……」

「まあ、学会じゃ史上最強のマッドサイエンティストなんて呼ばれているからな」

「事実でしょ」

少しだけ憮然とした表情の陸に、自分専用の蜂蜜を入れたミルクティーを口に運びながら女性が追い討ちを掛ける。

「民間人誘拐して人体実験したり、怪人作ったりした覚えは無いが」
「その代わり学会でマグナムぶっ放したり、研究所爆破したりしてるんじゃないか」

横目で女性を冷やかな視線で見ながら、陸が自分の分のコーヒーに膨大な量のミルクと砂糖をぶち込み、かき混ぜている。

由花は数ヶ月前、どこかの外国の大学で手榴弾片手に講義を行っ

て問題になった科学者がいたという記事が新聞に載っていたの思い出していた。

そういえばその記事に載っていた顔写真が彼の物だったような気が……………

「あたしの名前はマテリア、マテリア・イデリユースよ。マリーって呼んで」

「あ、羽霧 由花です」

微笑みながら女性「マリー」が差し出した手を、少し気が引いていた由花が慌てて握り返す。

「由花ちゃん、ね。よろしく」

「いえ、こちらこそ」

「自己紹介が済んだ所で本題に移ろうか」

自分の分のコーヒーをほぼ一息で飲み終えた陸がそう切り出しながら、空になったカップをテーブルに戻す。

「あ、あの、あの人は無事なんですか？」

相手が何かを聞くよりも速く、由花が一番気にしていた事を聞いた。

「ああ、あの馬鹿の事か。気にするな。あれ位ならあいつにとってはおかすり傷みたいなもんだ」

陸は平然とそう言い放つ。心なしか、その声には少し呆れた感じが混じっていた。

「確かにね。彼、切り落とした自分の手足平然とくっ付けたりするから」

「切り落とした手足を……………ですか？」

ふに落ちない表情をしている由花に、陸が説明を続ける。

「正確には、あいつは気孔術における内気の制御、すなわち生体エネルギーをコントロールして細胞組織をある程度変化させる事が出来る。それを応用して、あいつは傷口の癒着を早め、実質常人の五倍から七倍の速度で傷を治す事が可能だ」

「はあ……………」

「もつとも、実際あいつが自分で足切り落とした挙げ句、その場で繋いでみせた時には呆れたがな」

由花の脳裏に、彼が切り落とした足をいそいそとくっ付ける光景が浮かぶ。実際そんな事が現実に可能だとはとても思えないが。

「あれ位なら一週間もすれば完治するだろ。今度はこっちから質問だが、あの怪物に狙われるような覚えは在るか？」

「……………さあ……………」

「どんな些細な事でもいい。思い出せる事は無いか？」

陸からの質問に、由花は必死に色々な事を思い出すが、その中であのような感じの怪物とも人間とも関わった記憶は無かった。

「……………在りません」

「となると、やはりあいつは無差別に相手を襲っている事になるな」

「やはり？」

「『LINE』。データF-352を」

『分かりました、マスター』

陸の言葉に反応して、先程まで何も映っていなかったディスプレイに突然栗色の髪をした若い女性の姿が映り、次にある一点が点滅している地図が映し出される。

「今から五日前、D-20エリアで男性四人の惨殺死体が発見された。死因は全員鋭利な刃物による刀傷、中には胴体が両断された物まであった」

画面が推理ドラマによく出てくる死体の在った場所を示すテープがあちこちにある廃ビルの映像に変わる。確かにその中にはちょうど上下半分に分かれているシルエットの物も有った。

「彼らはこの廃ビルを根城にしていた窃盗団のメンバーで、血液から麻薬反応などが出た事により、当初は麻薬関係の揉め事による犯行と思われていた。ところが、警察が調査を進める内におかしな所が出てきた」

「おかしな所、ですか？」

「ああ」

画面がまた変わり、そこに大きさを示す目盛りと共に5cm位の小さな破片の映像が映し出される。

「これは死体の切断面から発見された物だが、主にカルシウムと酸化鉄、そして蛋白質を中心とした有機物から形成されている。警察の調査では、その蛋白質から被害者の物ではないDNAが検出されたが、こんな物は人間の体内には存在しない。もう一つはこれだ」

画面がまた変わり、今度は周囲に血の飛び散った通路の映像が映し出される。

「これは死体のあった場所の一つだが、その死体は背中から突き刺されて死亡していたにも関わらず、なぜかその背後にあったドアの表面にまで血が飛び散っていた」

「それって……………」

「そう、犯人はドア越しにドアを開けず突き通さずに相手を後ろから刺し殺した事になる。そしてこれはついさっき分かった事だが、その死体から発見された破片と、先程改修されたあの怪物の腕の一部が同じ物である事が判明した」

「！」

「すなわち、この殺人事件の犯人と君を襲った怪物は同一犯という事になる」

画面がまた変わり、そこに見覚えがある男の顔が映し出された。

「この人です！ 襲ってきたのは！」

「やはりか。こいつの名前はレイ 夏山。殺された窃盗団のメンバーの一人だったが、事件の後に行方をくらましている。この事件の一番の容疑者だった訳だが、たった今容疑者から犯人に確定したわけだ」

「あの怪物が人間だっていうんですか……………」

「正確には人間だった、というのが正しい」

驚く由花に、陸は多少の変化を加えてそれを肯定する。

「あなた達は一体何者なんです？ 不思議な力を持っていたり、凄い飛行機を乗り回したり、あまつさえこんな秘密基地まで在るなんて……………」

「そいつを説明するには少し長い説明をしなくちゃならないな」

陸は白衣の下から煙草を取り出すと、（由花の目には白衣の下にチラツとホルスターのような物も見えたが）それを口に咥え火を付ける。

「幽霊と妖怪の違いが分かるか？」

「幽霊と妖怪、ですか？」

いきなり出された変な質問に、由花は戸惑いながらも持っている知識を総動員させる。

「え〜と、幽霊っていうのは死んだ人間のお化けで、妖怪っていうのはそうじゃない物のお化けというところでしょうか……」

「あながちハズレじゃない」

自信無さげに言った由花の言葉を、陸が肯定しながら続ける。

「正確には、一般的に幽霊と呼ばれるのは死んだ人間に限らず、人間の残留思念や時には個人の思念その物が具現化した物だ。それに對し、一般的に妖怪と呼ばれるのは動物、植物、器物等の意思が具現、変貌した物を指す」

「器物、というと、物……ですか？」

「まあ、科学者が言うには非科学的な事を言っているように聞こえるかもしれないが聞いてくれ。極希に、そのどちら共取れない存在が生まれる事がある。『LINEA』、データA-15を」

『はい、マスター』

画面に奇怪な肉の塊のような物から、まるで闇その物が実体化したような物など、様々な怪物の姿が映し出された。

それは、由花が出会ったあの怪物によく似ていた。

「これらは、不特定多数の人間の思念、主に憎悪や怨念といったマ
イナス方面の代物が凝縮し、物理的に具現化、変貌した物だ。中に
は、君が出会ったような人間その物がこういった存在へと変化して
しまう事もある。妖魔、邪霊、ダークスピリット、ブータ、他にも
色々と呼び方はあるが、オレ達はこれをMind Metamor
phosis、通称M・^{エムズ}sと呼んでいる」
「エムズ……」

「そう、特に君が出会ったような、人間その物を母体として具現、
変貌した物をヒューマンベースと呼び、特に手強い相手となってい
る」

ヒューマンベース、彼もあの怪物を見た時にそう言っていたのを
由花は思い出した。

「もつとも、存在自体は珍しいとはいえ、昔から世界中で確認され
ていたし、それなりの対処も出来ていた。一昔前までは」

「一昔前までは？」

由花の疑問に陸が、無言で頷く。
すると、画面にあるグラフが映し出される。

「今から30年位前、ちょうど東京戦争が勃発して日本が都市国家
連合になった辺りから、このエムズを中心とした超常現象的事件が
日本全国で増加、特にここ10年間で異常なまでの伸びを見せた」
グラフは確かに2000年まで緩やかな伸びを示していたのが、
2000年を境に急激的に上昇し、つい最近の物は30年前の20
倍近い数字を示していた。

「事ここにいたり、従来の宗教団体、魔術結社、もしくは能力者個
人による対処では、増加の一途を辿る状況に対処しきれなくなり、
その状況を打開する為にある人物が一つの革新的提案を出した」

「革新的提案？」

「そう、その提案とは宗教、思想、科学、魔法、民族、種族、そういった物を超越して各分野のエキスパートを集め、全く新しい対魔機関を作り上げる事だった。ところが、この提案は各組織からの反感を買い、数少ない賛同者を集め、五年前ようやくこのMシテイに試験的にその組織は設立された。組織の名称はAnti Darkness Defence Life members、頭文字を取ってADDL、通称アドル。それがその組織、そしてオレ達の事だ」

「それじゃあ、あの人も！」

「ああ、あいつは対魔戦闘を任務とするバトルスタッフの一人、イグル・オブ・ウインドのコードネームを持つ戦士、それがあいつのもう一つの姿だ」

とても信じられる話ではなかったが、実際に見た後では嫌でも信じざるを得ない。

呆然とした表情の由花を見ながら、陸は吸っていた煙草を携帯灰皿にもみ消した。

「さて、多分お互いにとって一番重要な質問をする事になるが」

「は、はい、何でしょうか？」

まだどこか呆然としている由花を、陸は真剣な眼差しで見つめた。

「報告によれば、君はあのヒューマンベースの動きを予測出来たらしいが、それはなんでだ？ ひょっとして君は何らかの特殊能力を持っているんじゃないか？」

「えっ……………」

いきなり核心を突いた質問に、由花が返答に詰まる。

今まで怖がられるのを恐れて、自分の能力の事を誰かに話した事はほとんど無い。

それを、さほど面識の無い人物に話していいものだろうか。

由花はそう自問した。

「気にする事はないわよ」

今までのやり取りをずっと脇で聞いていたマリーが、空になったカップをテーブルに戻しながら口を挟んだ。

「陸は能力研究に関してはおそらく世界一の研究者だし、一応彼も能力者よ」

「悪かったな、一応で」

横目でそちらを見ている陸を無視して、マリーは更に続ける。

「それに、由花ちゃんが見たように、あたしにも特殊な力が在るわ。正確に言えば、アドルの構成員の内、約四割が何らかの能力を持っている事になるの。だから何も心配する必要は無いわ」

「…そうなんですか？」

「数値上はな。もつとも、精々マジックのトリックに使えるかどうかのC級能力者から、バトルスタッフの様なAからS級の実力者に至るまで様々だがな」

由花の疑問に、陸が答える。

それでも、由花はまだ迷っていた。

「心配しないで。たとえどんな力を持っていても、あたし達はあるあなたを卑下したり差別したりはしないから」

「……………分かりました」

意を決した由花が、小さな声で返答し、そしてゆっくりと喋り始めた。

「私には、人や物の過去や未来が見えるんです」

「具体的には？」

「えーと、その、何かを見ている時に、突然今見えている物とは違う物が見えてくるんです。それが、その見ている物の今まで起きた事が、これから起きる事なんです」

「例えば、目の前にいる人物がいつ何処で食事したとか、止まっている車が何処に行くかとか分かる訳か？」

「あの、いつかまでは分かるんですけど、場所までは……」

「具体的な時間まで分かるの？」

「はい」

マリーが驚いた表情で由花を見つめ、その脇で陸が少し首を傾げて考え事をしていた。

少なくとも、その動作の中に恐れや嫌悪は感じられないのが由花には嬉しかった。

「その力は自分の意志で制御出来るか？」

「勝手に見えるのは止める事は出来ませんが、見ようとすれば見えるみたいなんです。もっとも、自分の意志で力を使ったのは今日が初めてですけど……」

「初めてで能力を使いこなせた、か。何らかのデメリットや反作用は無いのか？」

「デメリットですか？ さっきも言ったみたいに、意識しなくても勝手に見える事が有って……」

「それ以外は？ たとえば妙に衰弱するとかいうことは？」

「勝手に見える事意外は特には……」

口籠もっている由花を見ながら、陸とマリーは由花に分からない専門用語の混じった相談を始める。

しばらく話し合った後、陸がおもむろに由花へと問い掛けた。

「少しテストをしてみたいか？」

「テスト？」

「そう、例えば」

陸が目の中のカップを指差す。

「このカップを、オレの前に誰が使ったか分かるか？」

「やってみます」

由花は目の前のカップに意識を集中させる。

思っていたよりも簡単に、もう一つの視界が開けた。

「20歳位の、灰色の髪でロングパーマを掛けた女性がミルクを飲むのに使ったみたいです」

「そつえば出勤する前にエリスが使ってたっけ」

自信無げに言った由花の言葉を、マリーが肯定する。

「その女性にはある人目で分かる身体的特徴が有るが、それは分かるか？」

「身体的特徴ですか？」

由花が再び意識を集中させてカップの過去を見るが、見えるのはあくまでカップの過去であって、その女性は肩くらいまでしか見えない。

「すみません、分かりません……」

「君の能力を調べる為のテストだから謝る必要は無い」

「まあ、確かに見れば一発だけど……」

表情のあまり変わらない陸に対し、マリーは苦笑を浮かべている。どうやら随分と目立つ特徴らしいが、由花にそれを知る事は出来ない。

「そんなに目立つんですか？」

「機会があれば会わせてあげるわ」

悪戯っぽい笑みを浮かべながらマリーが答える。

頭に疑問符を浮かべている由花に陸はテストを続けた。

「オレがさっき吸う以前に煙草を吸ったのはいつだ？」

「3時間位前です」

「マリーが4時間前にしていた事は？」

「なんか凄いいっぱいの犬猫達と一緒にシャワー浴びてますけど…

……」

「そつえばみんなとお風呂入ってたっけ」

「マリーさんて、動物の飼育員さんなんですか？」

「本職はね。その子達は全部あたしが飼ってるんだけど」

「……………」

由花が見たマリーの過去には、少なくとも20匹以上の犬猫がいたように見えた。

笑ってそれが全部ペットだというマリーに、由花は素直に驚いた。

「『LINA』、S-2カメラの映像を」

『はいマスター』

女性の声と共に、ディスプレイにこの秘密基地の何処かと思われる通路が映し出される。

よく見ると、画面に映っているドアの脇に男性用トイレの看板が付いていた。

「ここをこの後一番最初に利用するのはどんな人物だ？」

「なんて物見さすのよ！」

「施設において不特定多数の人間が一番利用する場所がここなただ」

マリーの突っ込みを陸が極めて冷静に返す。

由花が赤面しながらも未来を見通した。

「あ、あの、すぐに作業着を着て帽子を前後逆にかぶった少し小柄な人が…」

由花が言い終えるよりも早く、その通りの若い男性がズボンの前を押さえながらトイレへと入っていった。

「全問正解、か」

それを見ながら陸が呟く。

それから少し間を置いて陸は話し始めた。

「今のテストだけではハッキリとした事は言えないが、自分で能力を発動、制御出来る、能力を完全に理解、把握出来る、そして予知としては異常なまでの適中率を誇っている。これらから、君は少なくともB級、もしくはA級の能力者である可能性がある」

「A級……ですか？」

先程までの話から総合すれば、それは自分がバトルスタッフと呼ばれる自分の目の前で戦っていた人達とほぼ同等の能力を持っている事になる。

由花は彼らが使っていた能力と、自分の能力を頭の中で比較してみたが、とても自分がそれ程の力を持っているとは思えなかった。

「そして、これから君は重大な選択をしなければならない」

相変わらずあまり表情の変わらない、それでいながら少しだけ目つきを陰しくした陸がそう言いながら指を一本立てる。

「一つ目は、その能力及び今回の事件に関する記憶を含めた全てを封印し、一市民として平穩に生きていく」

「出来るんですか？」

「アドルの技術力を持つてすれば難しい事だ。そして二つ目はその能力を活かし、アドルの協力者になる」

二本目の指が立ち上がりながら内容を告げる。それは由花が考えた事も無かった能力の活用について。

「三つ目は、アドルのメンバーとなってその能力を更に開発し、それを最大限に活かして我々と共に闇と戦うか。この三つだ」

「彼女をスタッフ入りさせるの!？」

三本目の指と共に、驚くべき選択肢が告げられる。

それを聞いたマリーが驚いて陸の方を見ながら立ち上がる。

「恐らくは今までもっとも強力な時空透視能力者だ。これを逃す

手は無い。が、あくまで本人が拒めば無理強いさせる気は無い」

驚いて声も出ない由花に、陸は詳しく選択の内容を説明し始める。

「二つ目の協力者ならば、リスクは少な目だし、いつ協力するかも自由だ。だが、アドルの正規スタッフともなれば話は違う。有事の際、恐らくは君の能力を最大限に活かせるであろう戦闘のダイレクトサポートが任務となる。無論これには身体、最悪の場合には魂や存在といったレベルまでのリスクが伴う。もつとも、それなりの装備と報酬は約束される。どれを選ぶかはあくまで君の自由だ」

「あの、あたしは………」

突然の選択に由花は戸惑った。今までの人生の中で最大の選択に、どう考えても思考は空回りを繰り返した。

その様子を見ながら、陸はふと自分の腕の妙にごつい腕時計を見た。

「別に返答は今すぐでなくても構わない。時間も時間だ。色々あって疲れたろうから、今日はもう休んだ方がいいだろう。何なら部屋を用意しようか？」

由花が自分の腕時計を見ると、すでに12時を大きく過ぎていた。普段ならもう寝ている時間だが、色々な事が有りすぎた所為か、少しも眠気は感じなかった。

「結構です。寮に帰りますから」

「それじゃあその前に少し見学していきましょう」

立ち上がった由花の腕を、マリーが強引に引っ張る。

「あの、ちょっと」
「いいからいいから」

有無を言わずマリイが由花を引きずりながら部屋から出ていく。その様子を座ったまま呆れを含んだ瞳で見ていた陸は、おもむろに立ち上がると全く減らずに冷めてしまったコーヒーの入ったカップと、二つの空のカップを手に彼女たちの歩いていった方向とは逆方向の通路へと歩き始めた。

「ここって、勝手に見て回っていいんですか？」
「ま、ホントは駄目なんだけどね」

エレベーターの手前で掴んでいた腕を離れたマリイが、エレベーターのコンソールにＩＤカードを通してながら質問に応じる。
コンソールから短い電子音が響き、エレベーターの場所を示すランプがゆっくりと降りてくる。

「実を言うと、女同士で話がしたかったの」
「女同士、ですか？」

ちょうどその時、エレベーターの到着を示す電子音が鳴り、妙に分厚い扉が開く。
その中には先客が居た。

「お、そっち終わったのか」
「なんて格好してんのよ……」

エレベーターの中に居た長い黒髪の女性――瑠璃香がこっちを見て

声を掛ける。

その格好を見て由花は絶句してしまった。

古びたスニーカーに少し大きな目のジーンズを履いているのはいいとして、上は前を閉じていない男物のYシャツ一枚、その下は豊満な胸に巻いてあるサラシと首から掛けている古めかしい口ザリオだけ、という余りにもラフ過ぎる格好だった。

「寒くねえからどんな格好でもいいじゃねえか。それに女の体は見せる為に有るんだからよ」

「見てるこっちが寒い上に恥ずかしいのよ………」

大きな湿布が張られている肩をすくめながらの瑠璃香の返答に、マリーが顔に手を当てて呆れ果てる。

そんなマリーから由花へと瑠璃香が視線を移した。

「で、そいつどうするって?」

「陸はスタッフ入りさせる気みたい。何でもA級の時空透視能力者だって」

「ふーん」

瑠璃香がまじまじと由花の顔を覗き込む。

自分とは全く逆の大人びた女性の視線に、由花は思わず一歩退いた。

「別に取って食やしないよ。あたいの名は瑠璃香、バトルスタッフの一人さ」

「あ、羽霧由花です」

そう言いながら由花が差し出した手を瑠璃香が握った瞬間、由花の腕が180度捻られ、突き出された瑠璃香の左の肘が由花の顔の

数cm手前で止まる。

「で、どこがA級能力者だつて？」

「誰もA級戦闘能力者なんて行つてないでしょ！」

何が起きたのか理解できないでいる由花が目を瞬かせる。

数秒間の思考の後、ようやく自分が試されたいらしい事を理解した。

「でもこいつ、敵の動きは分かってたみてえだけど？」

「あの、あくまで見えている物の過去や未来が見えるだけで、自分の事とか、見えない位速く動かれたりすると分からないみたいなんです」

「使えねえな、そりゃ」

掴んでいた手を離しながらきつぱりと断言する瑠璃香に、由花は二の句を続ける事が出来なかった。

「何も戦闘に直接参加する訳じゃないんだからいいでしょ。後先考えず周囲ごと破壊しまくる誰かさんよりは」

「悪かったな、あたいは口と手と足が同時に出ちまうんだよ」

そう言いながら瑠璃香が自分の顔の高さまで持つてきた手を振ってみせる。

よく見ると、その手の裏表両側にはつきりとタコ―拳ダコと掴みダコの両方―が出来ていた。

「ま、てめえもくたばんねえてえどに頑張るこつたな。色々教えてやつからよ」

由花の肩へと腕を回しながら、その肩を痛い位の勢いで瑠璃香が

叩く。

色々と、の辺りで瑠璃香の目が意味有り気に細められ、叩くのを止めた手がゆつくりと下の方へと……………

「それじゃああたし達は行くから！」

その時点でマリーが慌てて由花をエレベーター中へと引きずり込み、扉を閉めた。

「…ちっ」

閉じた扉へと向けて舌打ちを一度すると、瑠璃香はその場を離れた。

「あ、あぶないところだった……………」

エレベーターの壁に頭を押し付けながら、マリーが肩で大きく息をしていた。

さっきの会話に何か危険なところが有っただろうか、由花は少し痛み肩―瑠璃香は軽く叩いたつもりだったが、筋力が違い過ぎた―を押さえながら考えた。

その答えが出るよりも、息を整えたマリーが向き直る方が速かった。

「いい、由花ちゃん。今後何があっても絶対に瑠璃香と二人っきりになっちゃ駄目よ」

「何ですか？」

明らかに理解出来ない由花に、マリーは慎重に言葉を選びながら説明を始めた。

「あのね、瑠璃香って確かにバトルスタッフとして見れば文句の付け様の無い程強いんだけど、その…性格というか、人間性にかなり問題が有るの」

「はあ……」

「例えば喧嘩好きだとかスピード狂だとか羞恥心が無いとかいうのはまだいいとして」

それだけそろっていればすでに十分な問題では？ と由花は思ったが、口には出さずに続きを聞いた。

「一番困るのはその性癖なの」

「性癖、というと？」

「瑠璃香って、顔さえ可愛ければ男でも女でも構わないのよ」

「あの……それって……」

男女関係についてはかなり疎い由花だったが、その貧困な知識から言われた事の意味を探り当てると、顔面を蒼白にした。

「ウソかホントは知らないけど、聞いた所によれば中学生押し倒しただとか、入っていたレディースランナーチームのメンバーの半分は肉体関係が在ったとか、警察に補導された時罪状に強姦罪を入れるかどうかでもめたとか、ろくでもない話は山の様に在るらしいから」

自分の理解を超えるような話に、由花の思考が停止寸前に陥る。が、次に言われた事は由花の思考を完全に停止させるのに十分だった。

「それに由花ちゃんもう好きな人いるしね」
「えっ？」

明らかに虚を衝かれた表情の由花に、マリーが意外そうな顔をする。

「ひょっとして……気付いてなかった？」
「えっ？ ええっ？」

由花の思考が完全停止から混乱状態へと移行。今まで自分の能力を知らない様にする為に、いつも他人とは距離を置くようにしてきた由花に親しいと呼べる友人は一人もいなかった。

ましてや、誰かを好きになった事なぞ一度も無いはずだった。

それを、今日会ったばかりの人物にいきなり指摘されても困惑するばかりだった。

「そっか、まだ気付いてなかったんだ」
「な、何でそんな事分かるんです！？」
「それがあたしの能力なの」

困惑する由花に、マリーが微笑を浮かべながら答える。

「あたしの力は動物、植物を含めたあらゆる生物や精霊にまで感応出来るテレパス能力なの。この力を使えば、周りにいる人間だけじゃなく、ありとあらゆる動植物の思考を知る事も出来るし、さっきの戦いみたいに精霊達に呼びかけて攻撃する事も防御する事も出来るの」

「それじゃあ、私の考えている事も全部分かるんですか？」
「その気になればね。もつとも、普段は力をセーブしているから、全部が全部分かるって訳じゃないの。ついでだから言っちゃうけど、

実はさつき陸と一緒に由花ちゃんの話聞いてたのは、由花ちゃんがホントの事言っているかどうか密かに調べて陸に教える為だったの」

口調こそ軽いが、その内容は由花にとって衝撃だった。

すなわち、彼女の知らない内にウソ発見器に掛けられていたような物だ。

「もっとも必要無かったみたいだけどね。由花ちゃん全然ウソついてなかったし、それにずっと彼の事ばかり考えてたし」

ゆつくりと由花の顔が赤く染まっていく。

まさかそこまで知られていたとは思ひもなかった。

「大丈夫、あいつ今んとこフリーだから、あたしが応援したげる」

「あの、でも…」

由花が口籠もっていると、ちょうどエレベーターの到着を示す電子音が短く響いた。

「それじゃ行きましょ」

「どこにですか？」

「お見舞いよ」

扉の開いた先には、さつきまで歩いていた通路に比べれば幾分近代的な通路が続いていた。

言われてみれば、それは病院の通路に見えなくも無い。

「さ、こつちよ」

歩き出したマリーの後ろに続いて、由花も歩き出した。

歩きながら、通路側に開いた窓から薄暗い部屋の中を見てみると、そこには沢山の医療機器と無人のベッドが一つだけ置いてあるのが見えた。

四つほどそういった病室を過ぎた所で、ようやく明かりの点いている病室へと辿り着いた。

マリーがその病室の扉をノックすると、どうぞ。という彼の声と共に扉が開いた。

「おとなしくしてる？」

「今んとこはな」

病室に入りながらのマリーの問いに、彼とは違う若い男の声が答えた。

病室の中には、患者着を着てベッドから半身を起こしている彼と、ベッドの脇の椅子に腰掛けて雑誌を読んでいる茶色の髪をした20代半ば位の男性、そして点滴架を止まり木代わりにしている包帯だらけのダイダロスがいた。

「おや、二人してお見舞いに来てくれたんですか？」

「まあね」

マリーの後に続いて入ってきた由花に意外そうな顔をしながら、普段と同じ穏やかな口調で彼が声を掛ける。

「怪我の方、大丈夫ですか？」

「ご心配なく。これ位ならすぐに治りますよ」

笑顔で答える彼を見て、由花は胸の支えが降りるのを感じた。それと同時に、病室に入った時から気になっていた疑問を持ち出した。

「ところで、それなんですか？」

由花は彼が寝ているベッドの下半分―何故かしめ飾りの付いた太いワイヤーで布団ごとグルグル巻きにされている―を指差す。

「ああ、これか。こいつは脱走の常習犯でな、今まで何度も怪我で出勤停止を食らっているにも関わらず勝手に出勤しては怪我悪化させるもんだから、こんな風にしとくんだ。もつともこれでもこいつがその気になれば簡単に抜け出せるんだだろうがな」

ベッドの脇に座っていた男性が呆れたような口調で由花の問いに答える。

隣でマリーがそれを笑いながら聞いている所を見ると、どうやら本当の事らしい。

が、次に男性が言った事はその場の雰囲気を一変させた。

「どうせこの怪我もこいつがまた自分を囚にでもして付けたもんだろ」

「ちよつと！」

マリーの声でこちらを見た男性が、由花の顔が青ざめているのに気付いた。

「……ひよつとして、言っちゃまずかったか？」

「一遍ちよつとこっちに来る！」

「おい待て、負傷者には四六時中のガードがきまり……」

「いいから！」

どこか気まずい雰囲気の中から、マリーが強引に男性を引きずって病室から出る。

病室の扉が閉まったのを確認してから、マリーは男性へと向き直った。

「どうしてアンタはいつもそう変なところで鈍いの！」

「何の事だ？ オレは空が助けたとかいう女が見舞いに来ただけだと思っ……」

マリーの周囲に彼女の感情の高ぶりに反応した精霊達の暴走――本当に飛び散っている火花や屋内なのに吹いている風――に気付いた男性がそこでようやく自分の失態を自覚した。

無論、自覚した程度でマリーの怒りが収まる訳が無かった。

「よく聞きなさい！ あのね、あの子も能力者なの！ それで彼女は空の事が好きなの！」

あたし達みたいなのが人好きになるのがどれだけ苦しい事がアンタにだって分かるでしょ！」

「分かった！ 分かったから落ち着いてくれ！」

耳の側で起こる火花だの突然凍る髪だのを必死に払いながら男性が謝罪する。

それを見たマリーが、怒りの表情はそのままに周囲の精霊達を元へと戻していく。

一通り精霊達の暴走が収まったのを確認してから、男性が大きく息を吐いた。ふと、思い付いた疑問を聞いてみる。

「お前、何でそんなに彼女に肩入れするんだ？」

マリーは病室の窓を横目で見ながらこう呟いた。

「似てるのよ、彼女。アドルに入る前のあたしと」

「その怪我…私の……せい…なんですか……」

蒼白な顔をして、消え入りそうな声で由花は呟いた。

「気にしないでいいですよ。これ位の怪我はしょっちゅうですから。それにボクも助けてもらいましたからね」

穏やかな声で彼が宥める。幾分由花の表情が和らいだのを見てから彼は言葉を続けた。

「由花さん、でしたね。兄さんから話は聞いてます。あなたがA級以上の可能性を秘めた能力者だって」

あなたにくらべれば私なんて、と言おうとして、由花は気付いた。まだ彼の名前も知らない事に。

「そう言えばこちらの自己紹介がまだでしたね。ボクの名前は守門空。守る門に空って字を書いてもりかどくう。Mシティ大学医学科四年生にしてイーグルオブウインドのコードネームを持つアドルのバトルスタッフ。それがボクです」

医学生にしてバトルスタッフ。空の口からその言葉が出ると、由花は改めて昨日まで知らなかった彼の二面性を認識した。

それでも、目の前に居る普段通りの優しい目をした彼と、蒼く輝く冷たい目をして傷だらけになりながら戦っていた彼とが今一つ繋がらず少し呆然としていると、ふと空から声を掛けられる。

「所で、兄さんからアドルのスタッフ入りを進められたって本当で

すか？」

「え、ええ。まだ悩んでるんですけど」

少しうつむきながら答えた由花が、ふと顔を上げる。

「空さんはどうしてアドルに入っただんですか？」

それを聞いた空の表情が急に真剣な物に変わり、突然着ていた患者着をはだけた。

「な、なにを……！」

初めて見る男性の生の肌に、由花が赤面しながら顔を背けようとする。

が、ある一点に目が行った途端そこに視線が釘付けになった。

空の左肩から斜めに走る、巨大な爪痕に。

「これは、七年前ボクが生まれて初めて魔と戦った時に付けられた物です。その時まで魔と戦う術を知らなかったボクは、目の前で先生が殺されるのをただ見ているだけしか出来なかったんです」

爪痕に手を当てながら、寂しげに言う空の衝撃の告白に、由花はただ沈黙して聞く事しか出来なかった。

「先生はボクに拳法と医学、そして――力は守る為に使う物――という心構えを教えてくださいました。それなのに、ボクは先生を守れなかった。だから今度こそ誰かを守る為に、ボクはその魔を追っていた道士に弟子入りしたんです。魔と戦う術を身に付け、今度こそ誰かを守るようにする為に。アドルに入っただのは、この力を一番活かせる場所だと思ったからです」

そこまで一息で言った空が、視線を由花の方へと向け、鋭い口調で問い質した。

「由花さん、あなたにアドルのスタッフになる気が在るのならば、ボクが道術を教えてくれた師匠に一番最初に聞かれた事と同じ事を聞きます」

「は、はい」

「あなたに、死、以上の恐怖に立ち向かう勇気は在りますか？」

真剣その物の空の問いに、すぐに答えられない由花に空は更に続ける。

「魔と戦うという事は、常人の考える以上に厳しい物なんです。もし戦いに敗れば、最悪の場合魂までもが魔に捕らわれ、死以上の苦痛に苛まれる事すら有り得るんです。それでも、あなたにそれに立ち向かう勇気が在りますか？」

しばらくの沈黙の後、由花はゆつくりと口を開いた。

「……正直、まだ分かりません……でも」
「でも？」

「もし、私の力が誰かの役に立つんだったら、誰かの助けになるんだったら、やってみたいんです。危険なのは分かります。ひよっとしたらもっと危ない目に会うかもしれないのも分かります。それでも、やってみたいんです！」

真剣な眼差しで問い掛ける空に、今までの人生の中で一番の気持ちを込めた瞳で由花は見つめ返した。

しばらくそのままの状態が続いた後、ふと穏やかな瞳に戻った空

が視線を外した。

「分かりました。どうやら本気のようにですね。ボクはもう止めません。そして約束します。もし由花さんが危険な目に会ったら、ボクが全力で由花さんを守ります」

「え……」

まるでプロポーズの様な（空自身に自覚はまるで無かったが）セリフに、由花が赤面して硬直する。

ちょうどその時、壁に飾ってあった時計が午前1時を示すチャイムを鳴らした。

「あ、あの、もうこんな時間なんで、私も帰りますから」

「引き止めちゃいましたか？」

「い、いえ。そんな事ないですから」

「それじゃ廊下に居る皆さんによろしく」

「はい、そ、それじゃあおやすみなさい」

赤くなっている顔を隠すようにそそくさと由花が病室から一步出ると、ちょうど通路の窓から死角になる位置に鈴なりに固まっている人達と目が合った。

『あ………』

小さなパラボナアンテナを病室側に向けている白衣を着た人達や、小さなカメラを窓の端から向けている作業着を来た人達（その中に病室にいた男性やマリー、それに瑠璃香や陸までもが混じっていた）総勢15人位が気まずそうな顔（若干呆れ顔や残念そうな顔）をした後、全員が口々に言い訳を出し始めた。

「いやこれは新型の集音機の実験を」

「ちよつとした好奇心という奴で」

「ちつ。てつきりあのまま濡れ場になると」

「べ、別に覗きとか盗聴とかでは」

「お前が言い出したんだろうが」

「てめえだつて乗ったじゃねえか」

「だから他意が有った訳では」

てんでんばらばらに言い訳を口にする中から一人の作業着をきた男性―さつきトイレに駆け込む所を見た人―が由花の目の前に進む。

「しつづれいしましたゝ！」

その掛け声と共に、ほとんどの人物が蜘蛛の子を散らすようにその場を離れる。

「さゝてと、警備任務の続行を……」

病室に居た男性がわざとらしい事を言いながら病室へと入っていく。

後には、何だったのか理解出来ずポカンとしている由花と、困った顔をしているマリ―と残念そうな顔をしている瑠璃香、それに何処か呆れている陸が残った。

「あの、今の人達は？」

「あゝ、一応今居たのは全員アドルのスタッフなんだけど、何でか残ってたスタッフに、由花ちゃんが空の彼女だつて噂が広がって、今二人つきりだつて知ったら、その、皆して覗きに……」

「音声付でな」

渋面で乾いた笑いを浮かべながら説明をするマリーに、陸が極めて冷静に補足を加える。

「……どこら辺りからです？」

「今度こそ誰かを、の辺りからだ」

陸の説明からすると、自分の言った事はほとんど聞かれていた事になる事に気付き、由花は赤面した。

二人きりだと思っていたからこそあんな思い切った事を言えたが、それを誰かに（しかも大勢に）聞かれていたとなると話は別だ。

「由花ちゃん？」

赤面したまま硬直している由花に、マリーは何かフォローを入れようとするよりも速く、瑠璃香が由花に近寄ってポンと両肩に手を置いた。

「ああいう時は勢いに乗せてそのまま犯っちゃった方がいいぞ」

「はい？」

「瑠璃香！」

マリーの怒号を無視して、意味の分かっていない由花に瑠璃香は更に続ける。

「空みてえな責任感が妙に強い奴は、一遍言わせちまえばこっちのもんだ。後はそれをちらつかせて押し倒しちまえばどう料理しようが思いのまま」

「一理有るな」

「二人共何考えてんのよ！ 由花ちゃんはあるんだ達みたいになんて性格してないわよ！」

瑠璃香のかなり無理のある助言と、それに賛同している陸にマリ
ーが大声でわめき散らす。

それをつるさそうに横目で見ながら、瑠璃香は更なる助言（？）
を続ける。

「取り敢えず初めてだってんならそれをネタにしてこちらがイニシ
アチブを握るか、手前まで焦らして…」

「い・い・か・げ・ん・に・しなさい！」

言葉の途中で、瑠璃香の後頭部に突然虚空に現れた野球ボール位
の水の塊がぶつかる。

「何しやがる！」

「純真な子にろくでもない事そのかすんじゃないの！」

「ただアドバイスしてるだけじゃねえか！」

「あんたのスレまくったアドバイスが由花ちゃんみたいな子の役に
立つ訳ないじゃないの！」

「やかましい！ そんなだからてめえは男の一人も出来ねえんだ
！」

「そ、それとこれとは関係無いでしょ！ それにあんたみたいに無
差別よりはいいでしょ！」

「あの、お二人とも…」

「誰が無差別だ！ あたいにだって好みは有るぞ！」

「顔さえ可愛ければ男だろうが女だろうがいくせに！ あたしだ
って何度危ない目に会ったか！」

「それくらいに…」

「そのたんびに精霊暴走させたのはどこのどいつだ！ あん時は死
ぬかと思っただぞ！」

「それなら少しは懲りたらどうなの！ さっきだって由花ちゃんの

とこ狙つてたんじゃない？」

「別にいいじゃねえか！ それともあたいに喧嘩売ろうつてのか？
それならいつでも買つて……」

エキサイトしていく一方の口論を、突然爆音の様な音が中断させる。

その音に仲裁を試みていた由花は体を硬直させ、口論していたはずの二人は一瞬にして表情を真剣な物へと変えて音のした方向へと向き直った。

その視線の先には、巨大なりボルバー式拳銃を上へと向けている陸の姿が有った。

「それ位にしておけ。バトルスタッフ同士の喧嘩なぞシャレにならんからな」

陸は拳銃を上に向けたまま平然とそう言い放つと、拳銃を白衣の下ホルスターへと戻した。

「何事だ！」

「ただの空砲だ。気にするな」

銃声を聞きつけた空のガードをしていた男性が慌てて病室から出て来るが、陸の返答を聞くとまたか、と渋い表情になった。

「陸、頼むからそんな化け物銃夜中にポンポン撃つなよ……」
「必要が有ったから撃つた。それだけだ」

相変わらず表情のあまり変わらない陸に、由花を除いたその場に居る人間全員が脱力する。

「……疲れたからけえって寝る……」
「……あたしも……」

瑠璃香とマリーの二人が脱力したままトボトボと歩いてその場を離れた。

「このガンクレイジーム……」

男性がぶつぶつと愚痴りながら病室の中へと（中から微かに空の笑い声が聞こえてきたが）引込む。

後には、陸と由花だけが残った。

「さてと、最終確認を取りたいんだが」

「え？」

突然話を振られた由花が驚くが、陸はそちらへと向き直って続けた。

「さっきまでの会話から、アドルのスタッフとなる意思が有る、と判断していいか？」

「は、はい！ よろしくお願いします！」

そう言いながら頭を深く下げた由花を見ながら、陸は表情を満足そうな物へとしながら（もっとも身近の人間にしか分からない程微弱な変化だが）宣言した。

「いいだろう。副総帥権限により、現時刻を持って羽霧 由花をアドル・アビリティスタッフの一員として登録する」

「ふ、副総帥？」

由花が驚いて陸を見る。まさか陸がそんなに偉い人だとは思って
もいなかった。

「驚く事はない。オレのアドルでの地位は副総帥兼サイエンススタ
ッフチーフ兼バトルスタッフチーフだ。他に出来る奴がいらないん
でな」

「はあ……」

啞然としている由花を差し置いて、陸が上を向いてそこにあるセ
キュリティカメラを見た。

「レックス、聞いてるんだろ。彼女のID登録を頼む。あと、『L
INA』にガーディアンスタッフの標準装備の用意を」

『り、了解』

スピーカーから慌てた男性の声が響いてくる。

「今のは？」

「メカニックススタッフの一人でな、元ハッカーだけにたまに覗きを
やらかすんだ。安心しろ、更衣室だのトイレだのまでは覗かん。覗
いたら女性陣に八つ裂きにされるからな」

「はあ……」

釈然としない由花を伴って、陸は下へと降りていった。

『EQUIPMENT ROOM 装備管理室』

そう書かれた扉の脇で、陸が自分のIDカードを脇のコンソール
に通し、短いシーク音の後にコンソールから出てきた小さいジェラ

ルミンケースを受け取る。

「後はIDカードだが…」

「あ、いたいた」

通路の向こうから、少し不健康そうな顔をした若い男性がこちらへと近付いて来た。

「君が由花ちゃんだね。オレはメカニックススタッフのアレックス・ライル。レックスでいいよ」

「あ、羽霧 由花です。これからよろしくお願いします」

差し出された男性の物にしては細い手を、由花が握って握手すると、レックスは懐から一枚のIDカードを取り出した。

「それじゃこれ、大事な物だから無くさないようにね」

「無くしたのは今の所お前と瑠璃香だけじゃなかったか？」

陸の突っ込みにレックスの顔が一瞬凍る。

「いや、その、それじゃあ！」

レックスが慌ててその場から離れる。

「あいつもコンピューター以外はずばらな奴だからな」

「そうなんですか？」

由花が首を傾げながら、渡されたIDカードを見た。

それは、一般的に使われている身分証明類を全て登録できるIDカードと全く同じ物に見えた。

「カードの右端、ちょうど顔写真の辺りに親指を当てて3秒ほど待て」

「こうですか？」

由花が言われた通りにしてみると、IDカードから短い電子音が響いた。

「それで指紋が登録された。カードの右端を端から端まで登録した指でこすってみる」

「？」

由花が取り敢えず言われた通りにしてみると、IDカードの表面が一瞬にして、八角形と五芒星を組み合わせたマークの入った物へと変わる。

「これって？」

「それがアドル専用のIDカードだ。有事の際はそれを見せればMシティの全ての公的機関が支援する。他のシティじゃ普通のIDカードとしてしか使えないから気を付けろ」

陸は更に小さいジェラルミンケースを由花へと手渡した。

「これがアドルスタッフの標準装備だ。詳しい事は送りながら説明しよう」

「あ、はい」

見た目よりも少し重いジェラルミンケースを持ちながら、歩き始めた陸の後ろに続いた。

「取り敢えず、今回の事件が片付くまで君にはボディガードが付く事になる」

「ボディガード？」

「そう、いつあいつに襲われるか分からないからな。ガード専門のガーディアンスタッフの一人が四六時中君の側に付く事になる」

「はあ…」

「心配無い。多分必要以上君のプライベートには干渉しないはずだ」

多分、という所が少し気になったが、由花は敢えて深く考えない事にした。

乗っていたエレベーターが到着を示す電子音を鳴らし、二人は着いた先、大きな車庫へと降りた。

「さてと、もう来ているはずなんだが」

「あ、おゝい」

声のした方向に二人が振り向くと、そこには由花がカップの過去で見たあの女性がいた。

女性はこちらの方へと走って来ると、由花を見て人懐っこい笑顔を浮かべた。

「紹介しよう、ガーディアンスタッフの一人、エリス・リュアンだ」

「エリスだよ、よろしく」

「羽霧 由花です。よろしく」

由花はエリスが差し出した何故か妙に爪の尖っている手を握ると、エリスはブンブンと勢いよく手を振った。

「しばらくの間、彼女が君のガードを勤める事になる」
「うん、つとめるつとめる」

妙にテンションの高いエリスに多少気圧されながら、由花は彼女をよく見てみた。

着ている服の上からでも分かるような豊満な胸に比べ、手足は細い。それに妙に鋭い爪が生えた手に…………

そこまで行つて、彼女はふと本来人間に無いある物が彼女に有る事に気付いた。

「あの…」

「何だ？」

「あれって…………」

由花は恐る恐るそれを指差した。

彼女の腰から生えている、灰色の髪と同じ色合いのしなやかな尻尾に。

「言つただろ、人目で分かる外見的特徴が有るって」

「でも、普通の人間は尻尾なんて…」

「当たり前だ。そいつは人間じゃないからな」

「！」

驚いて硬直している由花に、状況を理解していないのかエリスはキョトンとした表情をしている。それに応じて、腰の尻尾も元気に動いていた。

「説明するより見せた方が早いだろ。エリス」

「なあに？」

「ちよつと戻つてみせろ」

「うん、わかった！」

言つや否や、エリスの姿が由花の視界から消える。

正確には、彼女の衣服だけがその場に残り、体の方が消えた。

「ええっ！」

驚く由花に、崩れ落ちた衣服の中から、一匹の猫が現れ、由花の足にじゃれ付いてくる。

よく見ると、その猫は消えたエリスの髪と同じ灰色の毛並みをしていた。

「あの、ひよっとして……」

「そいつがエリスのもう一つの姿だ。一般的には獣人、ライカンスロープと呼ばれる種族だな。まあ俗的にはワーキャットだの猫又だのと言った方が分かるか」

完全に絶句している由花に、陸が説明する。

ちなみに猫「エリスの方は由花の靴紐にじゃれ付いていた。

「詳しい説明は車内でしょう」

陸は落ちているエリスの衣服を手早く集めると、それを持って駐車場の奥に止めてある自分の車へと近付いた。

「キーロックオープン、エンジンスタート、サブシートをノーマルにチェンジ」

陸が声を掛けると、止まっていた車の一台が突然始動し、車内から何か機械音のような物が聞こえると、ドアが勝手に開いた。

「さあ、乗るといい」

「この車って……フェラーリって奴じゃ……」

「フェラーリ456GT、もつとも中身は完全に別物だな」

陸が運転席と言うよりは操縦席に近い異常にスイッチや計器が多いシートにその体を押し込み、由花は多少たじろぎながらも助手席へと座る。エリスは助手席側から後部座席に入り込んだ。

「ポイントセット、Mシティ学園女子寮に設定、定速にてオートドライブスタート」

ドアが閉まると、陸の声に応じて小型のディスプレイに地図が映し出され、そこに指定のポイントがセットされるとハンドルが勝手に動き、赤の456GTは走り出した。

「すごい……」

由花が完全自動で動いているフェラーリに驚いているのを見ながら、陸は説明を始めた。

「まず、アドルの構成から教えておこう。アドルは性質上六つのスタッフから構成されている」

「六つ？」

「そう、戦闘専門のバトル、準戦闘兼ガード専門のガーディアン、非戦闘でありながら能力によるサポートを行うアビリティ、サポートマシンの設計、開発、整備を行うメカニック、能力の科学的研究、開発を行うサイエンス、医療専門のメディカル、この六つから構成されている。他にも協力者や予備役なんかもあるが、全体の構成人員は君も含めて72名だ」

「結構いるんですね」

「生憎とこれでも人手不足だな」

陸が手元のキーボードを叩くと、フロントガラスの一部に組織構成の概要図が現れる。

「各スタッフにはそれぞれチーフがいて、その上に副総帥と総帥がいる。主な事はこの幹部達で決められる訳だが、例外として能力者の発言は重視される。まあ君はその役になる訳だな」

「そ、そうなんですか？」

「ああ。ちなみにバトルスタッフは他のスタッフに個人的な装備なんかも依頼出来るが、メディカルスタッフからのドクターストップだけはどうしても拒否する事が出来ない。今の誰かさんみたいにな。そしてスタッフ全員に最低限の装備としてそれが配られる」

陸が由花の膝の上にあるケースを指差した。

「開けてみるといい」

由花がケースを開けて中を見た途端、目が見開かれたまま停止した。

「これ……！」

そこには、一つの腕時計と、瑠璃香が使っていたのと同じ変わった形の拳銃が入っていた。

「対魔用多用途拳銃、G・ホルグ。口径は6mm、普通の拳銃より口径は小さいが威力は強い」

「わ、私ピストルなんて……！」

「今から撃ち方を教える」

慌てふためく由花に、陸はG・ホルグを手にとって見せた。

「形式はケースレスオートマチック、装弾数は15発。リコレイス（無反動）システムが組み込まれているから反動はほとんど無い。弾丸はAからGまで七種類、Aは対魔用純銀製弾頭、Bは炸裂弾頭、Cは冷凍ガス弾頭、Dは徹甲弾頭、Eは対機械用ダイナモ弾頭、Fは焼夷弾頭、Gは対人用粘着麻酔弾頭になっている。一応弾頭の色とマガジンの底で見分ける様になってるが、慣れない間はAブレットだけ使うといいだろう」

「はあ……」

説明の半分も理解出来ていない由花に、陸が実際に弾を込めてみせる。

「ここを押せばマガジンが外れる、弾丸の入ったマガジンを入れたらここを引けば弾丸が装填されるから、あとはトリガーを引けばいい。撃たない時はここでセーフティが掛かる。射撃練習は明日以降行うからそのつもりで」

「はい……」

由花は弾丸が込められたG・ホルグを持ってその重量を確かめる。何故かそれが異常に重い物に感じてならなかった。

「こっちの腕時計は普通の電話機能付きの腕時計としても使えるが、時刻合わせと発光ボタンを同時に押せば緊急通信用として使える。通常通信は111をダイヤルすれば本部に繋がる。見た目以上に頑丈に出来ているからなるべく四六時中身に付ける様にしておくといい。次にあれについてだが」

陸が後部座席で丸くなっているエリスを指差す。

「アドルの戦闘要員の内、実に7割が人間以外の連中で構成されている。その多くが保護を条件に協力してくれてる連中だがな」

「そうなんですか？」

「端的に見れば、生まれつき能力を持っている人間は少ないし、それを活かせる人間はもっと少ない。君みたいに生まれつきの能力を何の修行も無しに完全に制御出来るのは非常に希なケースだ。それに対し、妖怪は生まれつき強力な能力を持っているのが多いし、物理的にも人間より頑丈な事が多い。主に長期の活動になるガーディアンスタッフのほとんどは以上の理由から妖怪達によって占められている。まあ多少変わっている連中が多いが、悪い奴等じゃないから必要以上に気にする必要は無い」

「そうですか……」

由花は後部座席にいるエリスをチラリと見る。ひょっとして他のガーディアンスタッフとやらもこういう人達なんだろうか、と少し不安に思ったが、口には出さないでおいた。

「ま、それ以上詳しい事はまた今度だな」

完全なオートドライブで走っていた車が停止し、寮のすぐ前でドアを開いた。

「すっかり遅くなったが、今日の学校はどうする？ 一日休みたいならこっちで手を回しておくが」

「あ、結構です」

「そうか、それなら授業が終わった後、詳しい諸手続きをやるから一度今日来た本部に来るように。アークノアは知っているな？」

「あの、この街の地下にある巨大な動物園の事ですか？」

「正確には生態系保護施設だ。そこがアドル本部の隠れ蓑になっているから、その事務所に特殊保護処置に付いて、と言えば通じるはずだ」

「はい、分かりました」

「あとは余計な事は考えず休むといい。何か有ったらエリスが守ってくれるはずだ」

「はあ……」

由花は何時の間にか目を覚まして、こちらを見ているエリスを見た。

どう見ても強そうには見えないが、陸がそう言うのなら大丈夫だろうと思う事にした。

「それじゃ、おやすみ」

「あ、おやすみなさい」

由花が車から降りて自分の部屋へと向かい、その後をエリスが追いかけて行った。

「……いい子じゃねえか」

由花の姿が見えなくなると同時に、車内に陸の物とは違う低い男性の声が響いた。

すると、シートの影から影が別れ、そのまま車内に出るとそれは盛り上がり、やがて少し人相の悪い痩せた男となった。

「だが、ガードを二人も付ける必要が有るか？」

「念の為だ。相手の能力は未知の点が多いし、下手したらエリスの鼻でも感知出来ない可能性が在る。あれだけの能力者だ、そう簡単

に失う訳にはいかない」

「へいへい、相変わらずガキにはお優しいこって」

「彼女は18だ。ガキという年じゃあるまい」

「オレの基準じゃガキなんだがな。ついでに聞くが中で見張ってていいか？」

「別に構わんが、他の連中にはれたら確実に誤解されるぞ。何せここは女子寮だからな」

男は低く舌打ちすると、側の電灯の光で出来ている影へと近付く。そして、現れた時を逆回しするようにまた影へと姿を変えると、その影へと吸い込まれていった。

「明朝には交代人員が来る。それまで妙な事するなよ」

「信用されてねえなあ……」

「お前の場合前科があるからな。また切り裂かれたくなかったらちやんと仕事しろ」

「ちよつと覗いただけでフクロにしゃがって、あのクソアマども……」

……

影から聞こえてくる愚痴を無視して、陸はハンドルを握った。

「オートドライブオフ、マニュアルに移行」

そのまま、陸は来る時とは比べ物にならないスピードを出しながらその場を去った。

2029年9月23日

今日は本当に色々な事が有った。

でも、敢えて書くべき事は、初めて自分の事を認めてくれる人達と会えた事と、どうやら、私は恋をしているらしい事。

これからどうなるかまでは分からない。

けれど、今までよりは、少し明るく生きる事が出来るかもしれない。

今は、自分の力を必要にしてくれている人達がいる事を思いつつ、眠りに着こうと思う。

すでにベッドには先客がいるけれど……

「はあっ……はあっ……」

狭い路地裏で、全身から何か焦げた匂いを漂わせている男が荒い息をしながら座り込んでいた。

よく見ると、男の顔の半面はケロイドで覆われ、片腕が半ばから無くなっていた。

男を見つけた野良犬が、猛烈な勢いで吠えたが、男はそちらを睨むと、残っている片腕を振るった。

次の瞬間には、斜めに両断された野良犬が路地裏へと転がる。

その死体から流れ出した血に、男は片手を付いた。

力在る者がその場を見たならば、男が血から精気をすするのが見えたとあろうが、路地裏には男以外の影は何一つ無かった。

「ちくしょう、あんな連中がいるとは……」

男は、昔誰からか聞いた事を思い出していた。

（この街には、化け物退治専門の組織があるらしいぜ……）

男は血塗れの手を見ながら、これからどうするべきかを考えた。

傷付いた体は、野良犬の精気程度ではとても癒し切れない。

「殺してやる、殺してやる、殺してやる、殺してやる……………」

男が呟く呪詛が、周囲に漂う瘴気を集め、その体へと吸い込まれて行く。

ミチリ。

男の体が、音を立てて更に深い闇の物へと変わっていった。

「つまり、この文の訳はその事によって彼はそうせざるをえなくなった、となる。また、ここの文法の使い方次第では…」

教壇で行われている説明を、由花は上の空で聞いていた。

今こうして授業を普通に受けている事自体が、どこか信じられなかった。

こうやって普段と変わらない時間が過ぎていくとまるで昨日の事が嘘のように思えてくるが、今腕にはめられている特製の腕時計とバッグの一番下に隠して持ってきたG・ホルグがその事を否定しているように感じられてならなかった。

朝目が覚めた時に見たのは、遅刻寸前の時間を指している時計と、隣で人間の姿に戻って全裸で寝ているエリスの姿だった。

二重の意味で出た悲鳴はその後の慌ただしさで周囲から忘れられ、何とか遅刻せずに学校に着いてからは何一つ変わらない日常が待っていた。

猫の姿になって通学の後を追ってきたはずのエリスの姿は何処かに消えていた。

たまに校庭にそれらしい猫が見えたが、すぐに見えなくなる。

疲労と寝不足も残っている為か、何かを考えようとしてもすぐに浮かんだ考えは淡雪のように消えていった。

「…ぎり、羽霧。おい、羽霧！」

「は、はい！」

「どうした、考え事か？」

「あ、あの、その…」

「それとも寝不足か？ お前の事だから夜遊びって事はないだろうが」

「いや、あの…」

「58ページの8行目からだ。読んでみる」

「はい、He is going to…」

クラスメートから失笑が漏れる中、由花は教科書を読み上げる。
何故か、そんな日常が貴重な物に思いながら。

昼下がり、お昼の客も一段落して客足の空いたある喫茶店に、一人の客が訪れた。

「いらっしやい」

洗い物を片付けていたやや年かさの女店長が気さくに声を架けた所で、それが見覚えのある人物だという事に気付いた。

「あら、今日は弟さんは？」

「ちよつと野暮用でな。それに、誰もいない方が都合が良かったんでな」

その客、陸は店長の前のカウンター席に座る。

「都合？ お茶でも飲みに来たんじゃないのかしら？」

「由花の事と、あんたの事についてだ」

グラスに注いだ冷水を陸へと進めた店長に、陸は一息で水をあおると続ける。

「由花ちゃんに、何かあったの？」

「ちょっとばかり面倒な事に巻き込まれている。だが、その件はオレと弟が責任を持つ。彼女に危険は及ばせない」

「信用できるのかしら？」

「少なくとも、あんたの経歴よりはな」

陸の一言に、店長の手が止まる。

「悪いが、彼女の身辺調査の都合上、あんたの事も調べた。IDは完全な偽造、しかもここに店を出す六年前より前の事は一切不明。極めつけがこれだ」

陸は懷から一枚の写真を取り出す。

画像データを印刷した物らしく、そこでは小料理屋の紹介と共に、今と変わらない店長の姿が映っている。

だが、日付は40年前の物だった。

「……………どうするつもり？」

「どうもしないさ。生憎この程度じゃ驚いてちや勤まらない仕事してるからな」

「……………」

「無理に事情を聞くつもりは無い。あんたがこっちに気付いてたように、こっちもあんたがただ者じゃない事はとうの昔に気付いていた」

「じゃあ、なぜ？」

「由花を保護してる事も気付いてたからだ。しかし、最早あんたの手に負える事態じゃなくなっている」

「あんた達ならどうにかできる、という保証は？」

「絶対、とは言えない。だが最大限の善処はする。オレは信用出来ないかもしれないが、弟は信じてやってほしい」

「……………彼、純粹な人ね。そして優しいわ。誰かのために身を投げ出

す事をためらいもしない。ちょっとだけ、あの子がうらやましいわ」

微笑を浮かべる店長に、陸は無言。

「お姫様を守るのはナイトの役目よ。魔女の役目じゃないわ。魔女に出来るのは水晶玉を覗いて、お告げを告げるだけ」

「だったらオレは、さしずめ堅物の將軍か。つまらなくて堅苦しい事ばかり口にして、その実、部下のナイトのまっすぐな生き様を羨望しているような……………」

「ままならない物ね、お互いに」

「そういう事だ」

「あまり、あの子に無理はさせないでね。全てを諦められるような子じゃないから」

「あいつがいる限り、そんな事は絶対させないだろう。させる気もないがな」

店長が出してきたコーヒーにミルクと砂糖をたっぷり入れ、陸はそれをゆつくりと飲み干した。

「オレ達は、彼女の行ける道を照らしてみる。あんたは、彼女の戻れる場所を照らしておく。どちらに進むかは、彼女が決める事だ」
「そうね……………」

静かな沈黙が、コーヒーの香りと共にその場に流れていた。

『次はアークノア前、アークノア前。お降りの方はボタンを押してください』

「お、降ります。降ります」

いつの間にかバスの中で眠っていたのを、猫のままのエリスが頬を舐める感触で目を覚ました由花は慌ててボタンを押した。

昨夜陸に言われた通り、学校が終わるとまた何処からともなく出てきたエリスを連れて、由花はARK NOAHの前までやってきた。

「ここ、だよな……」

腕に抱いたエリスが肯定の意味か一声鳴いた。

巨大地下生態系保護施設、ARK NOAHの前で、由花は足を止めた。

何気に側にある説明の看板をしてみる。

『当施設は、自然破壊による生態系の消失を防ぐ為、世界最大のジオフロント内に生態系その物を完全に再現、移植する事により、生態系に生きる生物全てを保護する事を目的に2025年に杉本財団が中心になって建造されました。内部は地球のありとあらゆる自然環境を再現したエリアに分けられ…』

由花はそこまで読んで視線を地下施設入り口に戻した。

世界的にも有名で、学校遠足の見学先にも選ばれるような所があるの秘密基地の隠れ蓑だと言われてもすぐにはピンとこなかった。

しばらく迷った後、由花は思い切って受付へと向かった。

「いらっしやいませ、何名様でしょうか？」

「あの、特殊保護処置について聞きたいんですけど……」

「分かりました。そちらの従業員用出入り口から……」

「由花ちゃんじゃない!」

受付の女性の言葉の途中で、聞き覚えの在る声がした方向に由花が振り向くと、そこにはARK NOAHの飼育員の緑色の制服に身を包んだマリーの姿が在った。

「マリーさん！」

「やあ、昨夜はよく眠れた？」

「あ、少し寝不足気味ですけど……」

「ちゃんと寝とかないとダメよ。ここは」

「その子が今朝言ってた新人？」

マリーと由花の会話に、受付の女性が割って入った。

「そうよ、詳しくはここでは、ね」

由花がキョトンとしていると、受付に目配せしながら由花を従業員出入り口まで連れていった。

ドアをくぐり、通路をある程度進んで地下に続いているエレベーターの前で立ち止まる。

「このエレベーターで、スタッフ専用のIDカード通せば勝手に本所に行けるの。他にも街のあちこちにあるけど、それは後でね。由花ちゃんのも登録されてるはずだからやってみて」

「はい」

由花は制服のポケットからIDカードを取り出してエレベーター脇のコンソールに通した。

短い電子音の後に、扉が開く。

「本部の全部のエレベーターがこのシステムだから、IDカード忘れない様にね」

「普通の人は絶対持つて歩くんじゃないですか？」

「前に一人無くした挙げ句に強引に降りてきて盛大に警報鳴らした馬鹿がいるのよ」

エレベーターに乗りながら、由花は昨夜陸が言っていた事を思い出した。

だとしたら、マリーが言っているのが誰の事が薄々予想出来たが、あえて口には出さないで置いた。

「あの、さっきの受付の人……」

「あ、彼女もアドルのスタッフよ。あたしも含めて、アークノアの従業員は全員アドルのスタッフなのよ。世を忍ぶ飯の姿って奴ね」

「彼女も……ですか？」

「まあね」

由花が腕の中にいるエリスを撫でながら聞くと、マリーは薄く笑いながら階を示すボタンを押した。

「アドル本部はARK NOAHの施設の下にあるから都合地下6階からだけど、一番上から格納庫、次がトレーニングルームや医務室、その下が研究室や資料室、一番下が動力室になってるから。結構広いから覚えるまではあちこちにあるコンソールからマップ見て歩いた方がいいから」

「分かりました」

マリーはエレベーターの中のコンソールを操作して、そこで由花が来た旨を伝えると、これからの指示が返ってきた。

「取り敢えず、着替えて健康診断だって。あたしもちょうど上がった所だから更衣室まで案内してあげる」

「どうもありがとうございます」

「いいのよ、なんたって今日から仲間なんだからね」

仲間。

その言葉が、由花にはすごく新鮮な響きを持って聞こえた。

「循環器系、呼吸器系、消化器系、泌尿器系、生殖系、神経系、特に目立つ異常は無し。筋肉系は全体的に未発達、運動能力は低めと思われる。五感の感覚器官はすべて平常値、能力に応じての変化等は後日に検査予定。性的経験も無し、と。もう服を着てもいいぞ」
「はあ……」

メデイカルスタッフの年増の女医に文字通り隅々まで検査を受けた由花は、顔を赤らめながらも服を着始めた。

学校の健康診断では絶対に調べられないような所まで検査され、少し嫌悪感もあつたがあくまで検査に立ち会っているのが女性だけという話なので文句は言わなかった。

「それじゃあ次は精神カウンセリングやるから、カウンセリングルームに。マリー案内を」

「OK」

服を着た由花は、マリーの後に続きながら通路を歩き始め、その足元を未だ猫のままのエリスが続く。

「変なところまで調べられてビックリしたでしょ」

「ええ、ちょっと……」

「でも、次のカウンセリングの方が意味危ないわよ。何せ担当

が……」

「やあ、君が由花ちゃんかい？」

マリーの言葉を、後ろから聞こえてきた男性の声が遮る。

「あ、あなたは……」

「オレはメディカルスタッフの精神科担当にして、アドル一の夢使い、麗夢^{れむ}・モーガン。よろしく」

それは、前に空と一緒にお店に来て、いきなり由花を口説き始めたあのくすんだ金髪の男性だった。

「羽霧 由花です。よろしくお願いします」

「いやあ、若い女性なら誰でも大歓迎だよ」

「本当に誰でもいいからね」

マリーが麗夢の言葉に寸鉄を突き刺す。

「気を付けてね。アドルで一番の女垂らしだから」

「酷いなあ。別に責任問題起こした訳じゃないし」

「ある意味もつとやばいわよ。どさくさに紛れて変な事しないようにあたしが見張ってるから、ちゃんとやるように」

「はいはい……」

カウンセリングルームと書かれた表札の付いた部屋に三人と一匹は入る。

グリーンを基調とした落ち着いた色合いの壁紙が張られた室内に、デスクとイス、そして壁際に何故か簡易型のベッドが備え付けられていた。

イスの一つを由花にうやうやしく進めると、麗夢はデスクをはさ

んで向かい合うようにして腰をおろす。

「さてと、まず最初に言っとくけど、カウンセリングと言っても、質疑応答だけって訳じゃない。一通り質問した後、オレが直に由花ちゃんの夢の中に潜らせてもらおう」

「夢の中？」

「そう、オレも一応妖怪って奴でね。相手の夢から精神状態を調べたり、場合によっちゃ夢の中で戦ったりするのがここでのオレの仕事って訳だ」

「……………はあ」

夢の中に入る、と言われてもイマイチ理解出来ず由花は首を傾げるが、麗夢は構わず続ける。

「まあ、ちよつとばかりプライバシーの侵害になるかもしれないけど、これもキマリでね。大丈夫、オレ口は堅いから」

「女性口説く時は軽いけどね」

マリーが睨むのを受け流しながら、麗夢は用意しておいたカウンセリング用レポートを広げてペンを取り出す。

「さて、まずは自分をなるべく詳しく自己紹介でもしてもらおうかな？」

「あ、はい。名前は羽霧 由花、年齢は18、都市立Mシティ高校普通科三年生で……………」

一通り質問が終わり、手元のレポートにあれこれ書き込みながら、麗夢が少し考えこむ。

「さてと、質問は以上で終わり。悪いけど、ちょっとそのベッドに横になってもらえるかな？」

「はい」

「押し倒したりしないようにね」

「押し倒すのは口説いた後、常識だろ？」

肯定か否定か、足元のエリスが一声鳴く。

由花はリアクションにとまどいながらも、簡易ベッドに横になった。

「これからちよつとした暗示を架けて眠ってもらうから。懐かしい夢を見たり、少し嫌な思い出を思い出せたりするかも知れないけど、大丈夫。目覚めは悪いようにはしないから。体から力を抜いて、ゆっくりと目を閉じて」

言われたように力を抜いて、由花は目を閉じた。

「息もゆっくりと、そうゆっくりと。段々体が楽になってきたら、頭の中もゆっくりと……」

小さな自分が見えた。

（これって……確か施設にいた頃の……）

小学校に入る前の自分が、洗濯物を干している寮母さんに近づいていく。

『先生、雨が降ってきて洗濯物濡れちゃうよ』

『そう？ でも由花ちゃん、天気予報は晴れるって言ってたけど？』

『でも、降ってくるの』

洗濯物を干す手を休めて、寮母さんが小さな自分の方を向いた。

『うん、確かに最近雨が多いけど、今日はよく晴れてるよ?』

『でも、降ってくるの』

同じ事を言う小さな自分に、寮母さんは首を傾げる。

『じゃあ、由花ちゃん降ってきたらお洗濯物入れるの手伝ってくれ
る?』

『うん』

洗濯物を干し終えた寮母さんに手を引かれて、建物の中へと小さな自分が入っていく。

(あの時は、雨の降る少し前から洗濯物入れようとしたけど、結局
全部濡らしちゃったっけ……………)

シーンが変わる。

真新しい制服に身を包んだ自分が、クラスメートの男子生徒を必
死になって説得していた。

(中学校入ったばっかの頃……………)

『行っちゃダメ! 行ったらミリアン君大怪我しちゃう!』

『あのな、何でたかだか釣りに行くのに大怪我すんだよ?』

『それは……………』

休日、海釣りに行くって行っていたクラスメイトが、波にさらわれて大怪我するのが見えたのを必死にどう伝えるべきか迷っている自分を、同級生は胡散臭そうな顔で見ていた。

『海に行つて怪我するんだつたら、誰も海水浴に行かねえよ』

『でも、危ないの！』

『へいへい、気をつけますって……』

呆れ顔の男子生徒がバッグ片手に教室を出ていき、後には説得出来なかった事を悔やむ自分と、それを見て何か囁き合っているクラスメイト達が残った。

（この後本当にミリアン君が大怪我して、それ以来クラスメイトに気味悪がられるようになったんだっけ……）

またシーンが変わる。

ベッドで半身を起こしている空に向かって、真剣な顔で何かをしゃべっている自分の姿があった。

（これって、昨夜の……）

『もし、私の力が誰かの役に立つんだつたら、誰かの助けになるんだつたら、やってみたいんです。危険なのは分かります。ひよつとしたらもっと危ない目に会うかもしれないのも分かります。それでも、やってみたいんです！』

お互い真剣な眼差しで見詰め合った所で、空の瞳が穏やかな物へと変わる。

『分かりました。どうやら本気のようにですね。ボクはもう止めません。そして約束します。もし由花さんが危険な目に会ったら、ボクが全力で由花さんを守ります』

『え……………』

(うわ……………)

思い出しても赤面するようなシーンをリアルに見せられ、気恥ずかしさでいたたまれなくなっていた時、記憶の中の自分の手をいきなり空が握り締める。

(え?)

記憶と違う展開に、疑問符を浮かべている間に、記憶の中の自分が空にいきなり抱きしめられる。

『そう、守ります。ずっと……………』

『あ……………』

(ええ?)

記憶の中の自分と、それを見ている自分が完全に硬直する。

空の腕の中で赤面状態で完全に硬直している自分の顔に、空の顔がゆっくりと近付いてきて……………

(ええええ?????)

体を急に起こす。

そこが横になったベッドの上だという事を認識した由花の耳に、
甲高い警報が響いた。

「これって……」

由花が戸惑う中、麗夢とマリーが真剣な顔で室内の壁にあったコンソールを見ている。

『D-22エリアにてM'sの出現を確認。Cクラス戦闘態勢が発令されました。バトルスタッフは至急出動態勢。繰り返します、Cクラス戦闘態勢が発令……』

「これって……」

「出撃よ」

コンソールの画面に映っている女性のアナウンスに、マリーが部屋から飛び出そうとする。

だが、マリーがドアを開けようとした時、彼女のと由花の腕時計が同時に鳴った。

「なに？」

「え、えと」

二人が同時に通信ボタンを押すと、そこから陸の声が響いてくる。

『マリー、由花と一緒にいるな？ 彼女に見学も兼ねて実際の仕事を見てもらう。連れて来てくれ』

「OK」

「見学？」

首を傾げる由花の手を取ると、マリーが急いで通路へと飛び出す。

「説明は行きながら！ 急いで！」
「気を付けて」

室内から手を振る麗夢と鳴くエリスに見送られながら、マリーは由花の手を引いて猛ダッシュでエレベーターに近寄り、IDカードをスロットに通した。

「あ、あの……」
「そのスロットにIDカード入れて！ 装備が出てくるから！」

即座に開いたエレベーター内部に連れ込まれてまだ困惑してる由花に、壁のスロットを指差しながら、マリーも反対側のスロットに自分のIDカードを入れると、壁の一部が開いて、そこから彼女が昨夜着ていたジャケットと装備一式が出てきた。

由花も真似をしてIDカードを通すと、IDカードに先程登録された身体データに合わせたジャケットが選別され、エレベーター内部の装備ハンガーに自動的に送り込まれて壁から迫り出してきた。

「それに着替えて！ 武器も忘れないで！」
「は、はい！」

由花が慌てて上着を脱ぐのを見ながら、マリーは下着姿になると耐熱、耐毒、シヨック緩和性を重視して作られたアンダースーツを纏い、チャックを閉める。

「あ、あとさつきは惜しい所だったけど、あれは麗夢のイタズラみたいな物だから、気にしないでいいわ」
「…そう、なんですか……」

アンダースーツ無しのジャケットだけを羽織りながら、由花が小

声で呟く。

「あいつ、夢を自在に操れる能力をたまにそんなしょうもない事に使うのよ。ま、続き見たかったら頼んでみたら？」

「け、結構です」

真っ赤になっっている由花に意味ありげな微笑を送りながら、マリ―は防弾、防刃性の特殊繊維と耐魔術性を持った絶縁繊維を重ね合わせたバトルスタッフ専用のバトルジャケットとスカートを身に纏う。

ホルスターやマグパウチ、救急医療キットや万能ツールが入ったポーチがずらりと付いたピストルベルトを締めた所で、ちょうどエレベーターが開いた。

「こつち！」

「はい！」

そこは格納庫へと直結している通路で、通路の向こう側には発進準備を忙しく進める整備員達の姿が見て取れた。

通路を駆け抜けて格納庫内に入り、そこにアイドリング状態に入っている巨大な飛行機、A D D L ^{デュボン}指揮旗艦の搭乗用ハッチに飛び込む。

「ブリッジへ！」

マリーの後が続いて、由花もブリッジへと続く扉を潜る。

「現在状況は？」

「発生地域周辺の民間人の避難率は60%。現在、警察の特殊機動隊第3小隊が交戦中！」

マリーと同じ素材で出来た男性用のバトルジャケットを着て、昨夜首から掛けていたごついゴーグルを架け、それから伸びるコードをコンソールに繋げている陸と、由花と同じアンダースーツ無しガードジャケットを着たレックスが忙しそうにブリッジで発進準備を進める中、マリーはシートの一つに腰掛けると、シートベルトを締めた。

「あの、私は…」

「そっちのシートに座ってくれ。もう直発進する」

陸に指差されたシートに腰掛けた所で、バトルジャケットに袖を通しかけの瑠璃香と、その後にガードジャケットを着て手に日本刀を持った20歳位の若い男性が続いてブリッジに飛び込んでくる。

「くそっ！ 人が気持ちよく寝てる所叩き起こしやがって！」

「ここんとこ連続っすね」

由花の隣の席に座った男性が、ふと由花を見る。

「あの、彼女は？」

「昨夜入った新人」

「あ、羽霧 由花です」

陸の短い説明に、由花は隣の席の男性に自己紹介しながら頭を下げる。

「オレは御神渡 おみわた 敬一、バトルスタッフ研修生の陰陽師。ま、よろしく。」

「手っ取り早く言えば見習いで空の補欠代わりって奴だな」

自己紹介しながら片手を差し出した敬一が、瑠璃香の説明で顔が引きつる。

「せ、せめて期待のホープとか……………」
「見習いは見習いだろ」

容赦ない瑠璃香の一言に、敬一が暗い顔で自分の膝にのの字など書き始める。

『デュポン発進可能臨界まであと3分』
「おしゃべりは終わりだ。もう直発進するぞ」

警報と同じ女性の声のアナウンスと陸の警告に慌てて敬一が自分のシートベルトを締める中、ジェット機とも違う独特の起動音が少しずつ大きくなっていく。

「昨夜に続いて連続か……………昨日の奴か？」
「いや、衛星からのオーラ量からじゃ、せいぜいC級、それが二体」
「妙ね？ 一辺発生すればそうそうすぐには……………」
「下手したら、拾った可能性もある。十分注意しろ」
「整備員退避完了、リフトアップ！」

レックスの操作で、デュポンの真上のハッチが次々と開いていき、そこをデュポンを乗せた巨大なリフトが上がっていく。

「上部ハッチ、完全解放確認、リフト地表面まで到達！」
『デュポン発進可能臨界に到達！』
「発進」

陸の号令と同時に、全長50mはある巨体が、宙へと飛び立つ。

「ポイントセット、事件現場に設定、第二戦速にてオートクルーズ」
『了解、到着は12分後の予定』

脳波同調システムを組み込んだゴーグルから直接指令をデュポンの航行システムに送ると、陸はバトルスタッフ達の方へとイスごと振り返る。

「警察からの情報によれば、目標は18分前、D-22エリアの路地裏にて通行人によって発見されたらしい。今の所死者は出ていないが、第一発見者を含む4名が負傷、現在特殊機動隊第3小隊が交戦しつつ、目標を足止めしている。作戦は、目標エリア上空にてマリと敬一はユニコーンにて降下、機動隊と代わって戦闘に突入。瑠璃香はその隙に向かいのビル屋上にスレイプニルで降下、結界を張って目標を封じ込めた後に、戦闘に参加。以上質問は？」

「ないね」

「了解と」

「特になし」

『到着まであと7分』

「全員降下用意、『LIN A』各サポートAIに作戦と周辺状況をダウンロード」

『了解、ダウンロードします』

サポートAI『LIN A』が各バトルスタッフ専用に設計、製作されたサポートマシンに搭載されているサポートAIに周辺状況と作戦概要をダウンロードしていく。

「第一降下予定ポイントまであと700m！」

「特殊機動隊に至急戦闘を停止して撤退するよう連絡」

『了解』

「行くわよ!」

「おっしゃあ!」

「了解!」

出撃の為にブリッジを三人が走り出て行く中、由花は半ば呆然とその背中を見送る。

まるでテレビのヒーロー番組でも見ているかのような展開に、自分が何をどうすればいいのかすら分からない状態でただ呆然とするしかなかった。

「由花」

「は、はい!」

陸に呼ばれて思わず上ずった声で返答した由花に、陸は大きめのヘッドマウントディスプレイを手渡す。

「それを被っておけ。全方位投影型だ。何か見えたら至急報告」
「は、はい!」

慌てて由花がそれを被ると、途端に内部に周辺一体の映像が微妙な微調整を施され、無理なく見れるよう調整された映像として視界に広がっていく。

その視界の中の一点で、体を構成する肉が始終変化し続ける奇怪な怪物が見えた。

(あれが……M's………)

思わず生唾を飲み込む由花の視界に、小さな映像が別ウィンドウで表示された。

「第一降下予定ポイント到達！」

『サイレント・ネィチャー、出ます！』

ヘッドマウントディスプレイの通信機に、中央に巨大な80mmリコレイス・キャノンを装備した純白の戦闘用ホバークラフト、《ユニコーン》のオープンキャノピーの中で操縦桿を握ったマリーの声が響いた。

格納庫のハッチから、純白の機体が飛び出す。

空中に踊るユニコーンの機体が、重力制御システムとマリーの操る風とを受けて、落下速度を調整しながら、地面へと舞い降りる。

「先制！」

「オン アビラウンケン！召鬼顕現！」

着地と同時に、ユニコーンの操縦席のマリーが80mmリコレイスキャノンのトリガーを引き、後部座席の敬一が印を切りつつ呪文を唱えて呪符を投じる。

発射された80mm榴弾がM'sの半身を吹き飛ばし、呪符から変じた鳥―陰陽道で使われる式神という使い魔―が残った半身に襲い掛かる。

『当該目標Aの残存オーラ量70%！ まだ来るわよ！』

ユニコーンのコクピットディスプレイに映し出された紅髪的女性―サポートAI『MEIL』の警告が響く。

「『M E I L』！ ダイレクトサポート！ 直接戦闘に移行するわ！」

『OK！』

『第二降下予定ポイント到達！』

「ダーティエンジェル、行くぜ！」

右側のサイドカーにプラズマランチャー、左側のサイドカーに多目的ミサイルポッドを装備した重武装戦闘用バイク《スレイプニル》の漆黒の機体が宙へと踊り出し、すぐ真下のビル屋上に降り立つ。

「降りるぞ！」

『グラビティグリップ（人工重力接地）システム起動』

サポートAI『A R E S』がシステムが起動させるかどうかの暇も無く、スレイプニルがビルの端から飛び出すと、その反対側のビルの壁面に垂直に着地する。

「いつくぜ〜〜〜！！」

機体を壁面でスピンさせて真下に向けながら、瑠璃香がスロットルをフルに回しこむ。

壁面を猛スピードで滑走しながら、スレイプニルが落下するよりも早く地面へと近づいていく。

『おい！ 任務を忘れるなよ！』

「分かってる！ サークルポッド射出！」

スレイプニルの左側のサイドカーのミサイルポッドから後ろ向き――方角的に見れば真上――に一発の特殊ミサイルが発射され、空中まで上がったそれは外部力バーが外れて、自動的に内部システムが方角を修正、北を頂点とした五芒星の頂点の位置にそれぞれ小型の楔を撃ち出した。

「我が前方にガブリエル、我が後方にウリエル、我が右手にラファエル、我が左手にミカエル！ 我が四囲に五芒星在りて魔を阻まん！」

片手でスロットルを握りながら、瑠璃香が十字を切りながら《四大天使の守り》の術の聖句を唱える。

聖句の終わりと同時に五つの楔が共鳴し、それぞれの結ぶ光線を発してそれが壁となつて結界を形成する。

「おうし、ぶちかますぞ！」

地面に前輪が接地すると同時に、スレイプニルを数回スピンさせて反動を消した瑠璃香が、壮絶な笑みを浮かべて戦場へとスレイプニルを走らせた。

（スゴイ……………）

ヘッドマウントディスプレイに映し出されるあまりにも非日常的な戦いに、由花は圧倒される。

マリーの呼んだ火の精霊が業火となつてM'sに襲い掛かり、それを喰らったM'sが自分の体の肉その物を砲弾のように飛ばしてくる。

敬一が肉弾を潜り抜けながら間合いを詰め、繰り出された居合抜きがM'sの体を大きく斬り割く。

瑠璃香がスレイプニルでもう一体のM'sの周囲を旋回しながらG・ホルグを連射し、さらにスレイプニルのプラズマランチャーを撃ち込む。

「これならすぐに片がつくか……………」

陸が指揮官席でぼそりと呟くのが聞こえた時、突如として由花の視界に別の光景が広がっていく。

「あ……………」

「どうした!？」

由花の視界に、今とは別の時間の映像が映っていく。

そこに、今戦闘が行われていくのとは別の場所に、肉が盛り上がっている、そして異形の怪物を形作っていく光景が映し出されていた。

「もう一体現れます!」

「何!? 何分後だ!」

「今から………… 5分後!」

「結界外に高オーラ量反応が急激に増大中! 多分これです!」

「オレが出る!」 『LINA』! 全操作を移行! 搭乗ハッチを開け!」

『了解!』

ゴーグルからコードを引き抜きながら、陸が自分の足元から、自分の身長よりも更に長い巨大な錫杖を取り出す。

よく見ると、錫杖の反対側は三叉戟さんさげき―槍の両脇に三日月状の刃が

取り付けられた武器——となっている。

「レックス！ 後は任せた！」

「り、了解！」

ブリッジから走り出しながら、陸は懷から数珠を取り出し、精神を集中させる。

「黄泉に巢食いし邪鬼よ、闇に在し悪鬼よ！我が盟に従い、その姿を現さん！ オン！」

乗降ハッチの前に辿り着くと、陸はブリッジからの遠隔操作で開けておいたハッチから淡く輝き始めた数珠を握った手を宙に突き出す。

「来たれ、愚竜^{ぐりゆう}！」

数珠の一つが光を放ち、そこから全長5mくらいの小型の竜、正確には竜の前身である蛟^{みぎうち}が現れる。

「行くぞ」

陸が自らの使い魔、蛟の愚竜に飛び乗り、由花が見た発生ポイントに急ぐ。

（この狭い範囲にほぼ同時に三体、考えたくは無い事態が予想できるな……）

ゴーグルに転送されてくるデータを脳内で整理しながら、陸が僅かに表情を硬くする。

ちょうど地面に到達する寸前に、彼の眼前の空中に突如として肉

が湧き出し始める。

「オン マリシエイ ソワカ！」

愚竜から飛び降りつつ、陸は真言を唱えて手にした錫杖戟をその肉へと向けて振り下ろした。

「もう一匹だと!？」

『今陸さんが相手してます!』

「三体も同時なんて……………」

瑠璃香が《ミカエルの盾》の術を使ってM'sが吐き出してきた瘴気を防ぎつつそれぞれのサポートAIからの報告に舌打ちし、マリーが消火栓から呼び出した水の精霊を高圧で圧縮した水の槍と化してM'sを貫く。

「早いとこ片付けないと!」

敬一が刃を鞘に収め、居合の構えを取る。

『目標A、B共に残存オーラ量2000以下に低下!』

『一気に片付けて!』

『ARES』『MEIL』両AIの報告に、三人は目配せして頷く。

「たたむぞ! 敬一そいつをそこに止めとけ! あたいがこいつをそっちにまとめる!」

「了解!」

敬一がM' sの攻撃を掻い潜りつつ、居合の間合いに近付く。

「主よ！ 汝全ての罪を背負いし時の戒め、我に現し聖なる血潮流
さん事を！」

瑠璃香が聖句を唱え、両手にキリストが処刑された時の傷―聖痕
を両手に浮かび上がらせる。

「おらあ！」

「はあああああ！！！」

瑠璃香が聖痕の力を乗せた拳でM' sを殴り飛ばし、敬一が最下
段から旋回しつつ上昇する変形居合―御神渡家伝来退魔用剣術、光
背一刀流《光螺旋^{ひかりらせん}》でM' sを無数に斬りつける。

だが、旋回の止まった一瞬の隙に、全身を切り刻まれたM' sが
腕とも触手とも取れる肉塊を振るい、敬一の腹を殴りつけた。

「ぐっ！」

「敬一君！」

殴り飛ばされた敬一がとつさに受身を取って体を回転させ、即座
に起き上がって戦闘態勢を取る。

「いくぞ！」

敬一の安全を確認したマリーが、瑠璃香の声で敵へと向き直る。

（風よ……………）

マリーが風の精霊に呼びかけ、その呼びかけに答えた風の精霊が二体のM'sの周囲に小型の竜巻を形勢していく。

「臨、兵、闘、者、皆、陣、列、在、前！ 縛！」

敬一が片手で腹を押さえながら、刀を縦と横に交互に振る印―早九字という物―を結び、術を発動させる。

「ノウマク サーマンダー バーサラダー センダンマーカロシャ―ダー……」

「汝、彷徨える魂よ。暗闇にその身を委ねし哀れなる子らよ……」

敬一が緊縛呪で相手の動きを更に押さえ込む中、瑠璃香は十字を切って聖句を唱える。

「神と子と聖霊の御名の元、我、十字架^{とじか} 瑠璃香が汝の魂に救いをもたらさん事を！ イエヒー・オール！」

浄化用の聖句の詠唱を終えると同時に、瑠璃香が両手を前に突き出す。

聖句の詠唱と同時に竜巻に捕らえられたM'sの周囲が光が溢れ出し、聖句の終わりと同時に眩いばかりの閃光が周囲を満たす。

それが消えると、皆が警戒しながらそれぞれの術を解いていく。

竜巻の消えた後には、僅かな肉片のような物が宙にあったが、やがてそれは地面に落ちるとゆっくりと風化していった。

『残存オーラ量、10未満にまで低下』

『当該目標の完全浄化を確認』

サポートAIの報告を聞いた三人が警戒を解くが、すぐにその顔

は引き締まる。

「まだ残ってるぞ！」

「陸の方に行かないと！ 敬一君は残って」

「へーい」

気の抜けた返事をしながら、殴られた腹の具合を確かめつつ敬一がその場に座り込む。

「見習い卒業はまだ先だな！」

瑠璃香が敬一に嫌味を言いながら、スレイプニルに飛び乗ってアクセルを吹かせる。

「待って！」

それを追って、マリーもユニコーンのコクピットに滑り込んで操縦桿を握り締めた。

連射された50AE弾が、M'sの胴体に突き刺さる。

陸は手早くシリンドーラッチを操作してシリンドーをスライド、空薬莖を路面に落とすと、手にした巨大なりボルバー拳銃―S&W（スミス&ウエッソン）社IMI社技術提携記念モデル、S&W 50マグナムにスピードローダーを使って次弾を装填する。

（当該目標のオーラ量、12%減。質量、再増大を再開。目標へのダメージは極めて軽微）

ゴーグルを通じてデュポンから送られてくるデータを脳内で整理すると、陸は50マグナムを一度懐のショルダーホルスターに戻し、錫杖戟を両手で構える。

それに対して、B級ホラー映画のゾンビか、子供が作り損ねたマネキンのような姿をしたM'sは、崩れてるのか溶けてきているのか判然としない足で陸に向けて歩を進めようとする。

（グールタイプか……近くで量産されたか？）

『グ、おアアあうウうつ………』

『キュコー！』

陸が思考する中、悲鳴とも呪詛ともつかない声を上げながらM'sがその顎を開いた瞬間、上空に浮かんでいた愚竜が甲高い泣き声を上げつつ雷を浴びせる。

『おおおおアああ！！』

雷をまともに喰らったM'sが多少体制を崩しながらも、絶叫と共に口から瘴気の塊を吐き出す。

（形勢オーラ量、1800。危険！）

「オン マリシエイ ソワカ！」

吐き出された瘴気の塊を危険と判断した陸が、摩利支天の真言を唱えながら錫杖戟を振るう。

力の込められた錫杖の先端が、瘴気の塊を明後日の方向に弾き飛ばす中、陸は更に錫杖戟を振るって三叉戟の先端をM'sへと向け、手元のスイッチを押し込んだ。

穂先の根元部分にセットされたリニアカタパルトが作動し、発射された穂先がM'sの胴体突き刺さる。

「オン アビラウンケン バザラ ダドバン！」

穂先と柄を繋ぐ特殊鋼製のチエーンを手繰り寄せつつ、陸は錫杖戟を中間で分離。錫杖部分を握り締めつつM'sとの間合いを一気に詰め、大日如来の真言と共にその胴体に錫杖を叩き付ける。

錫杖から溢れ出した光がM'sを閃光に染め、それが晴れるとそこには胴体が大きくえぐれたM'sの姿があらわとなった。

（当該目標のオーラ量、2000にまで低下。未だ具現可能レベル。ダーティエンジェル、サイレント・ネイチャーの到着まであと94秒）

「それまで片は………つかないか」

陸が呟きながら、三叉戟のスイッチを操作して穂先を巻き戻す。二つに分かれた錫杖戟を一つに戻すと、陸はそれを再度M'sへと向けて構えた。

「行くぞ！」

陸の声に呼応して、愚竜が無数の雷を発する。

豪雨の如く襲い掛かる雷にM'sの体が覆い尽くされ、更に陸が50マグナムを抜いて、雷の合間からの確に50AE弾を叩き込む。

『おうああアあー!!』

雷に全身を焦がされながらも、M'sが陸へと襲いかかろうとするが、伸ばされた腕を高周波振動を付与された錫杖戟の穂先が斬り飛ばす。

『どけっ！』
『どいてっ！』

通信機から同時に響いた瑠璃香とマリーの声に、陸が後ろに跳び退る。

その後を追おうとしたM'sの頭部と胴体に、プラズマ弾と80mm榴弾が炸裂した。

（当該目標、物理具現最低限界を突破）

「『LINA』！ タイプHポッド投下！」

『イエス、マスター』

陸がM'sの肉体がダメージ限界に達してのを見ると、『LINA』に浄化用サークルポッド――科学的に製造された魔方陣形成用の楔――の投下を命令、それを受けた『LINA』が即座にデュポンからポッドを投下、空中で五つに分かれたポッドが、M'sの周囲を囲むように突き刺さる。

「オン マカラギヤ バザラシュニシヤ バザラサトバ ジャク
ウン バン コク！」

陸が手印を組んで五大明王の一つ、愛染明王あいぜんみょうおうの真言を唱えると、それに反応したサークルポッドの一つの表面カバーがスライド、梵字の掘り込まれた胴体が淡い光を放ちながら回転し、陸の術を増強させていく。

「オン ソンバニソンバ ウン バザラウンパッタ！」

続けて手印を組み替え、降三世明王じょうさんせいみょうおうの真言を唱えると、別のポッドのカバーがスライドして胴体部の旋回を始め、先程のポッドと共

鳴して光が増していく。

「オン アミリティ ウンパッタ！」

「神と子と聖霊の御名において、土は土に、チリはチリに、闇は闇へと帰れ！」

陸が続けて唱えた軍荼利明王ぐんだりみょうおうの真言を唱えている所に、その場に到着した瑠璃香が聖句を唱えながら指先で宙に五芒星を描き出す。

瑠璃香の術にも共鳴したサークルポッドが、瑠璃香の指先が描き出す五芒星の軌跡をなぞる様に光の線で結ばれ、再度具現化しようとするM'sを押さえ込んでいく。

「いける！」

ユニコーンを横滑りさせながら停止させたマリーが、用心のために腰のG・ホルグに手をかけたまま、光を増していく魔方陣を見守る。

「オン シュチリキヤラ ロハ ウンケンソワカ！ オン バザラ

……」

「アテー・マルクト・ウエ・ゲブラー……」

二つの浄化術が同調し、具現化しようとする闇が、浄化しようとする光に覆われていく。

「ヤキシヤ ウン！」

「ラ・ルオラム・アーメン！」

真言と聖句が終わると同時に、閃光が周囲を満たす。

閃光が晴れた後には、戦闘の痕跡だけが残されていた。

（残存オーラ量、自然値。完全浄化を確認）

「ふう……」

陸が息を吐き出しながら、戦闘態勢を解く。

「由花」

「は、はい！」

「これがオレ達の仕事だ。大体分かったか？」

「た、多分……」

由花の自信なさ気な声に、その場にいる皆が含み笑いを漏らす。

「交戦終了。ただし警察の現状封鎖は解くな。周辺調査に移る」

『了解』

『先程、MシティD-22エリアで発生したテロ事件ですが、警察当局の発表によると、犯行グループは遺伝子管理法違反の生物兵器を使用した疑いが有りと見て、警戒を高めています。ここ数年の内に世界中で増えてきた遺伝子管理法違反による各種犯罪の増加は、警察も頭を悩ませている所です。これに伴い、ICPOは世界各国の警察首脳陣を集めて特別対策局の開設を検討中との情報も……』

街頭テレビのニュースをぼんやりと見ながら、由花は目の前の状況を直す。

ADDLのサイエンスタッフと思われる白衣を着た者達や、戦闘を終えたばかりのバトルスタッフ、更には人の姿に戻って尻尾を振りながらそこいら辺を嗅ぎ回っているエリス等が調査の真っ最中だ

った。

「発見しました！」

路地裏から上がった声に、その場にいた全員がそちらを振り向く。路地裏へと皆が駆け寄る中、先頭にいた何人かが突然足を止める。

「？」

遅れてそちらに向かった由花が首を傾げる中、路地裏を向いている雑居ビルの扉を開けてその中を見た者達が青い顔をして顔を背けている。

「こいつは……………」

「予想以上だな……………」

「うつ……………」

その中を覗いたバトルスタッフ達も顔色を変え、呆然と扉の向こう側を覗いていた。

「あの……………」

そちらに近寄ろうとした由花が、足元が濡れているのに気付く。だが、それは水溜りでなく、赤黒い血溜まりだと気付くと顔色を変えた。

「ひっ……………」

「それでその状態なら、こっちは見ない方がいいぞ」

陸の声に、由花が無言で頷きながら後ろに下がる。

「『LINA』、警察の鑑識を呼んでくれ。この数はウチだけじゃ無理だ」

『了解』

通信機に呼びかけながら、陸が室内に一步入る。

中はバーか何かだったらしく、薄暗い割には広い店内が広がっていた。

だが、今その店内にいるのは元客や元ホステスと思われる、無数の屍だった。

普通の人間ならば匂いだけで嘔吐しそうな血臭の中、陸が店内を進む。

そのむせ返るような血臭の中に、違う匂いが漂っているのを陸は気付いていた。

（マリファナか……… 非合法のドラックバーといった所か？）

陸がしゃがみ込んで死体の一つを検死し始める。

（死亡原因は異常なまでに鋭い刃物による刀傷、しかもどれを見ても刃の疲労損傷による傷口の変化は認められず。そして………）

陸が、苦悶の表情を浮かべて腹ばいで絶命している別の死体を裏返す。

（腹部が内部から外側に向けて貫かれている。やはり奴か………）
「いるいる、やべえのがいっぱい」

瑠璃香がスケッチブック片手に、陸のそばに近寄ってくる。

「どうだ？」

「こんだけの死体があるにしちゃ、そこいら辺のは大した怨念も持つちゃいねえな。多分食われてる」

「呼べるか？」

「それは大丈夫。活きがいいからな」

瑠璃香はスケッチブックを開くと、ポケットからサインペンを取り出して口でキャップを外して手に持った。

そして、目を閉じて精神を集中させ、その惨状の犠牲者となった者達の魂へと呼びかける。

（知らせたいんだろ………来いよ………）

己自信の体に、瑠璃香は故意に彷徨っている魂を呼び寄せ、憑依させる。

途端に、瑠璃香の手が凄まじいスピードで動き、スケッチブックに何かを描いていく。

自動筆記、と呼ばれる能力を使って瑠璃香の手が、魂の持っているデータを描いていく。

やがて、手が止まった所でゆっくりと目を開きながら十字を切つて、憑依していた魂を抜う。

スケッチブックには、逃げ惑う犠牲者と腕を刃に変じてそれを惨殺していく男、そしてその男に集まっていく黒い霧のような物を描いた絵があった。

「間違いねえ、あいつだ」

「さつき相手した奴は、あいつが殺して食ったこいつらの怨念の残りカスが奴の瘴気を浴びて具現化したのか………やばいな」

陸が苦々しげに顔を歪める。

残りカスだけで三体ものM'sが発生したとなれば、その大元がどれだけの力を蓄えているかは予想もしたくない気分だった。

「瑠璃香、念入りに被っといてくれ」
「了解」

瑠璃香が腰のポーチから聖水と聖書を取り出すのを横目で見つつ、陸は入り口から顔だけ出すと青い顔をしながら立っている由花を手招きする。

「由花、扉付近の過去を見てみてくれ」
「は、はい」

路地の入り口からこちらを伺っていた由花が陸の指示に慌てて能力を発動させる。

「……！ いました！ あの男が1時間前にここに！」
「1時間か………」
「エリスにでも追わせてみる？」
「う？」

マリーの指摘に、周囲の匂いを探っていたエリスが反応するが、陸は出入り口付近に転がっていた金属製のシガレットケースを手に取り、首を横に振った。

「止めといた方がいいな。野郎、殺つてくだけじゃ飽きたらず、ここにあったヤク全部がめつてつてみたいだ」

陸が手にしたシガレットケースの匂いを嗅いでみて、明らかに煙草以外の匂いが付いているのを確かめる。

「エリスにこれ以上嗅がせるのは止めさせる。下手にヤクでも吸ったらひっくり返るぞ」

「エリス！ ストップ！ ストップ！」

マリーが慌ててエリスへと駆け寄る中、陸は無造作にシガレットケースを投げ捨てる。

「殺されたのが14人、全員の怨念の予想総合量からさっきの三体分を引いて、それがまんま奴に食われたとして、それから想定される奴の成長比率は……………」

陸が懷から煙草を取り出して、それに火をつけながら脳内で下手なパソコンより複雑なシュミレーションを計算していく。

「予想オーラ量、約10万。±15%といった所か……………」
「こちらの計算もそう出ました」

『LINA』からの返答に、陸が紫煙をゆつくりと吐き出す。

「バトルスタッフの平均数値と同じ、か。厄介な事になってきたな……………」

「何時もの事だろ」

聖水を撒きながらの瑠璃香の茶々に、陸は低く苦笑した。

同時刻 地下水管理室内

「ふうう……………」

男は、手にしたマリファナ煙草を胸一杯に吸い込む。

紫煙と共に広がっていく陶酔感を味わいながら、男は足元に転がっている下水管理人の死体を無造作に踏みつけながら、室内をゆっくりと歩き回る。

今まで財布の都合で手に入れられなかった上質な麻薬の数々を次々と味わってみるが、麻薬特有の陶酔感はあるけれども、これだけ一度に服用すれば必ずあるはずのフラッシュオーバー等の悪影響は全く起きてこない。

「こいつはいい……………」

何本目になるか分からないマリファナ煙草に火をつけると、男は死体をソファで代わりにして座り込む。

「だが、最高じゃあない……………」

火をつけたばかりの煙草を投げ捨て、男は再生したばかりの腕を刃に変えると、尻の下の死体に突き刺した。

そして、刃をゆっくりと引き抜くと、それに付いている血をやけに長くなっている舌で舐め取る。

「こいつだ……………だが、鮮度がイマイチだな……………」

わざと残した隻眼以外は、最早傷らしい傷も残っていない顔を歪めるようにしながら、男は低く笑った。

「どうせなら、鮮度のいい最高級の奴を……………だな」

血臭と麻薬臭の立ち込める地下の一室に、いつまでも低い笑いが響いていた。

δ THEN WIND IS BLOW

「10万……ですか」

見舞いがてらの報告に来た陸の言葉に、ベッドの上の空が深刻な顔をする。

「しかも、昨日の時点での計算数値だ。最悪、まだ他にも食ってる可能性もあるしな」

母親から見舞いの品として渡された折り詰めの中身を物色しつつ、陸が告げる。

「オマケにヤクで元々イカレてた所為か、頭の方はそれ以上イカレてないらしい。痕跡を辿るのも困難している状況だ」

「最悪だな」

空のガードに付いている茶髪の男性、ガーディアンスタッフに所属する人狼のバロン・牙神が顔をしかめながら、折り詰めの中身付き鳥唐揚げをキープする。

「早い所どころにかしないと、更に犠牲者が増えますね……」

「そういう事は怪我が治ってから考えてくれ」

五目いなり寿司を咀嚼しつつ、陸はベッド脇に置かれていたカルテの診療結果に目を通す。

そこには、出勤不許可の印がしっかりと押されていた。

「瑠璃香の奴はともかく、敬一も負傷して戦力が落ちてる。アクラ

スの発動も考慮した方がいいな」

「Aクラス？ 2年ぶりにか？」

Aクラス戦闘態勢―ADDLの全戦闘可能人員の実戦投入―の発動の可能性に驚きながら、バロンが骨ごと唐揚げを噛み砕く。

「前は総力戦だったが、今回は相手の能力が特殊過ぎる。下手な鉄砲の数を揃えとく事が重要だ」

「数合わせかい……………」

「実際、やっかいな能力ですからね。ボクも由花さんの能力が無ければどうなってたか」

「お前が本気になれば、なんとかなるだろう？」

「その可能性は高いな」

話しつつも、二つの箸が折り詰めと口の間を忙しく往復する。

「あの状況では、そうする事は不可能でしたけどね」

「相変わらず優しい奴だな」

「判断としちゃ間違っていない」

病室備え付けの冷暖一体型保管庫から缶入りのお茶を人数分取り出した陸が、それを投げ渡す。

「お、わりいな」

「どうも」

それを受け取った空が、ようやく箸を伸ばそうとした時、病室のドアが控え目にノックされる。

「どうぞ」

「失礼します」

開いたドアから、ケーキの包みを持った由花とマリーが姿を現す。

「ケーキ買ってきたんだけど、デザートにでもどう？」

「それはどうも。ただ、デザートにするには少し問題が……………」

空が改めて折り詰めの中身―当人が箸をつける前に何故か三分の二以上が消失している―を見た。

「あんた達、何しに来てるのよ…………」

「見舞いと報告」

「ボデイガード」

折り詰めの中身を見たマリーが陸とバロンを睨みつけるが、二人は缶のお茶をすすりながら平然と答える。

「はいはい、それじゃあこっちはあんた達の分無しね」

「ケチ」

「別に構わん。もう帰る所だしな」

恨みがましそうな目でマリーが広げるケーキを見るバロンを尻目に、陸がその場を立ち去ろうとする。

だが、入り口付近で立ち止まると、室内に振り返った。

「マリー、由花、恐らくは数日中に奴との総力戦になるはずだ。体調を整えとけ」

「…了解」

一瞬だけ、ケーキを広げていたマリーの手が止まったのを、由花

は気付いていた。

男は悩んでいた。

自分を痛い目に会わせた奴らにどう報復するかを。

街中で暴れておびき寄せるといふ手も有ったが、それでは面白味に欠ける。

「どうするか……だな？」

高純度のLSDを二の腕の静脈に注射しながら、男は考える。

そこで、最初に少女を襲った場所が高校の学生寮だった事を思い出す。

「そつだ……」

薬の影響で異様に興奮していく思考の中、男は今の己を最高に満たす為の計画を練り始めた。

『バトルシュミレーション、タイプ37―28計算終了。当該目標殲滅までの所要時間38分、当方の損害は重傷2名……』

（いや、それじゃダメだ。タイプ37―18の方を一部改訂、改訂内容は周辺損害の値を被害レベル4まで承認。再シュミレートを）
『イエス、マスター』

自分自身がプログラミングした世界初の擬似人格保有型第7世代AI『LINA』と自分の思考をダイレクトコネクト（直接接続）

しながら、陸は無数のシュミレーションを繰り返していた。

『計算終了。所要時間は22%減、当方の人的被害は32%減です』
(それでも最低一人は病院送りか……………相手の成長予想パターンをもう少し絞り込めればいいんだが)

『現状ではこれが限度です。周辺損害の被害レベルを8まで容認可能ならばこちらの被害は0で済みますが……………』

(街一区画吹っ飛ばすのか？ 議会の能無し連中が許す訳ないがな)『ですよね』

(そうというのは勝手にやって、後で適当にごまかすもんだ。貴重な人材傷つけるよりは楽だからな)

『それはそれで問題になる可能性が…』

(どうせ騒ぐのは金の問題だ。政治家なんてのは被害者よりも被害額を気にする連中だからな。取りあえずこれ以上やっても時間の無駄だ。タイプ37バトルシュミレーションを現時点で終了。現時刻のスタッフの活動状況を確認)

『現時点で活動中のスタッフのサーチを開始……………H-17エ

ウォン・バイエン

リアにて羽霧 由花のガードにエリス・リュアン、王 白遠の二名、入院中の守門 空のガードにバロン 牙神が一名。E-31エリアにて十字架 瑠璃香が当該目標H-8を散策中の模様。他スタッフはCレベル警戒態勢シフトです』

(当該目標H-8を確認次第、全スタッフをBクラス戦闘態勢に移行)

『了解』

ダイレクトコネクトを解除した陸が、ゴーグルを外しながら腰掛けていたイスを少し倒す。

首筋を鳴らしながら、先程までのシュミレーションを脳内で反芻するが、すぐに止めると、イスから立ち上がる。

「向こうが餌に食いついてくるのを待つしかない……か？ 罾の中
のな……………」

「え、と……………」

ルーズリーフの中に書き込まれた方程式を解いている途中で、その計算の矛盾に気付いた由花が、しばし手を止めて考え込むと、計算途中の式を消して新しく計算をやり直す。

夜中と言っている時間を見している時計と、残っている課題の量に溜息をつきながら、由花は一度計算の手を休める。

視線を横に向けると、自室のベッドの上で猫状態のエリスが大きなあくびをしている。

「陸さんにも教えてもらった方がいいかな……………」

ここ数日のハードスケジュールで溜まっている課題の処理方法を模索しながら、由花は多機能デスクの隣にある備え付けの小型冷蔵庫から飲み物を探して、冷えた紅茶とエリス用にと買っておいたミルクを取り出す。

（あの状態だと、やっぱりお皿に入れないとダメかな？）

何気無く丸くなって居眠りに入っているエリスを見た時だった。突然、今とは別の視界が広がる。

そこでは、この部屋でエリスが何かと戦っている姿が在った。

「あ……………」

愕然とした由花の手の中から、取り落とした二つの飲み物が滑り落ちる。

感覚からいえば、それは今から五分後。

つまり、今すぐそれが始まってもおかしくはない。

（ど、どうしよう！）

パニックに陥りかける意識をなんとか静めるよう心がけながら、由花が今日教えてもらったばかりの非常事態マニュアルを思い出す。

「そ、装備の確認と連絡！」

由花はバッグを引っ繰り返して底に沈めておいたG・ホルグを引っ張り出し、何度か失敗しながらもマガジンを出して残弾を確認すると初弾を装填する。

ハンガーに架けておいた制服のポケットから支給された腕時計を出そうとした時、エリスが唸り声を上げているのに気付いた。

「もう！？」

由花は非常通信のスイッチを押し込むと、震える手でG・ホルグをエリスが唸っている虚空に向けた。

「こちら、由花！ て、敵です！ 敵が出ます！」

『落ち着いてください。正確に現状を報告…』

『LINA』からの返信の途中で、虚空から出現した刃が、飛び退いたエリスの下にあったベッドを切り裂く。

「あ、あいつです！ あのヒューマンベースが！」

『了解。戦闘はエリスに任せて退避してください』
「よお、久しぶりだな……………」

虚空からあの男の顔が現れると由花を見て陰湿な笑みを浮かべた。

「ひっ……………」
「フウアアア！！」

由花が震えながら床に尻餅をついた脇で、エリスが甲高い雄叫びを上げながら男の顔に襲い掛かる。

その姿が、途中で猫から獣の四肢と牙を持った獣人の姿へと変わり、ナイフよりも鋭利な爪が男の顔をえぐる瞬間、顔は再度虚空に消えた。

『こえー、こえー。カンフー使いの次は猫娘のボディーガードかい。まるでRPGだなあ？』
「フウウウウ……………」

男の嘲笑が響く中、四肢を地に着け背を吊り上げる文字通り猫の威嚇体制を取った状態で唸り声を上げる。

『じゃあ、まずそっちの猫娘から…………』
「フアアアア！！」

虚空から刃の腕が出現するのとエリスの姿が由花の視界から消えるのは同時だった。

そして、再度エリスの姿が現れた時、エリスの口から半ばから食い千切られた刃の腕が咥えられていた。

『ヒヤ、ヒヤハハハ！やるじゃねえか！』

腕を食い千切られたにも関わらず哄笑を上げる男の声が響く中、エリスが啞えていた腕を放すと、それが宙にある間に爪を振るい、完全な細切れと化した肉片が床へとぶち撒けられる。

「ひっ…」

悲鳴を上げそうになるのを、由花は手で口を塞いで押し殺す。その眼前で、口を朱に染めたエリスが普段の能天気な性格からは考えられないような獰猛な戦闘態勢を取り続ける。

『じゃあこいつはどうだ！？』

突然エリスの周囲の空間を全て覆い尽くすような無数の刃の髪が出現する。

「フウウウー！」

エリスの姿が再度掻き消え、文字通り目にも止まらぬ超高速のスピードで巧みに刃の髪を掻い潜る。そして。

「え？」

由花が自分の体を覆う浮遊感に気付いた時、彼女を狙って刃の腕が振り下ろされ、それに気付いたエリスが由花の襟首を啞えてそのままガラス戸を突き破って外へと飛び出す。

「ええっ？」

視界一杯に割れたガラス片と空が広がっているのを由花が認識した直後、視界から空が急激的に遠ざかる。

自分の部屋が3階だった事を思い出しながら、襟首を咥えられたままの由花はエリスと共に落下し、そのままエリスが全身のバネを利用して落下の衝撃を殺して着地すると背中で器用に由花の体を受け止める。

ころんとエリスの背中から地面に落ちた由花はしばし呆然としていたが、慌ててG・ホルグを構えようとする。

だが、すぐさま横にいたエリスに体を押し倒され、風に舞ったエリスの髪の一部を横薙ぎに振るわれた刃の腕が切り裂いた。

『ひやははは！ どこまで頑張れるかな！？』

その声と同時に、虚空から無数の刃の腕が出現し、一斉に二人へと襲い掛かった。

「ひっ！」

恐怖の為におもわず由花が目をつぶった瞬間、何かがぶつかり合う音が周囲に響いた。

「……？」

由花が恐る恐る目を開くと、自分の眼前で、刃を防いでいる黒い棒のような物が視界に飛び込んできた。

「え？」

周囲を見ると、同じように無数の刃を同じ数の黒い棒が受け止めており、よく見るとその黒い棒は街灯の光で出来た影が不自然

に伸び、その伸びた影から突き出ていた。

『なんだあ？』

男「怪物も首を傾げる中、影から伸びていた棒は縮んで影の中へと戻り、代わりに影が突然盛り上がって人の形を取ると、その影が薄れていつてそれは手に装飾を施された棍を持ち、口元に不敵な笑みを浮かべた痩せた男へと変化した。

「王！」

「よお」

エリスに片手を上げてあいさつしながら、その痩せた男「ガーデ
イアンスタッフの王 白遠は手にした棍を構えた。

「あ、あの」

「説明は後だ！ オレとエリスが相手してる間に逃げな！」

「は、はい！」

『させるか！』

走り出した由花の背に向かって先端に刃の付いたムチのような触手が無数に襲い掛かるが、王が二本の指を口に当てその隙間から吐いた息を業火と化して触手を全て焼き払う。

「これでちつとは点数稼げたかな？」

由花の姿が遠ざかっていくのを見ながら、王が含みの有る笑みを浮かべながら手にした棍で自分の足元に手早く方陣を描くと、そこでタップダンスのような足踏みをし、最後に方陣の中央に棍を突き立てる。

すると、周囲の空間が揺らめき外界とこちらを隔てる結界を構成した。

『てめえ……』

「この間のG1ですっちまってな、今金欠なんだよ」

引き抜いた棍を手元で回しながら、王が悪人のような頬を歪ませる笑みを浮かべる。

「危険手当が出ねえと今月暮らしてけねえんだ。その分、付き合ってもらっぜ！」

『死んで金の心配なんていらなくなりな！』

「フウウアアアアア！」

棍を構えた王が自分の本来の姿、白い体毛に覆われた妖猿の姿と変じ、それに続くようにエリスが唸り声を上げる。

次の瞬間に三匹の異形の死闘が、幕を開けた。

『その地下鉄、降りてすぐの女子トイレの奥から二番目に入ってください』

「は、はい！」

通信機からの指示に律儀に返事をしながら、由花は息を切らせつつ階段を駆け下り、指定の場所に入る。

『その消音機の上部のスリットにIDカードを通して、壁に出てきたスキヤナに手を当ててください』

指示通りに消音機の隙間に偽造されたスリットにIDカードを通し、スキヤナに手を当てる。

スキヤナがIDカードのIDとスキャンした指紋、そしてそのトイレの各所に秘密裏にセットされているフレームスキヤナがボディデータをそれぞれチェックしてそれが登録されたアドルスタッフの一員と判明すると、壁がスライドしてそこから基地直行のエレベーターが出現する。

慌てて由花はそれに乗り込むと扉は閉まり、同時にスキヤナも壁に収納されて数秒後にはそこはただのトイレに戻った。

「はあっ……………はあっ……………」

由花は壁に手をつき、荒い呼吸をなんとか整えようとする。

彼女のそんな状態などお構いなしにエレベーター内部の簡易浄化システムが機動。床に六芒星のパターンが浮かび上がると同時に天井の四隅から聖水が数秒間噴霧され、由花の紅潮した頬を微かに濡らした。

『基地到着まであと287秒。到着と同時に出撃ですが、大丈夫ですか？』

「だ、大丈夫です……………」

『LINA』からの伝令に何とか応えながら、由花は浄化システムの停止と同時に壁から出てきた装備に手を伸ばす。

（空さんと約束した物……………自分にやれる事をやるって……………）

不慣れな手付きで握ったままだったG・ホルグをホルスターに収めつつ、由花は決意を新たに……………

「……来た」

「何が？」

ベッドに横になって医学書を読んでいた空の呟きに、バロンは手にしていたクロスワード誌からそちらへと視線を移す。

それに僅かに遅れて、緊急出動を示す警報が室内に鳴り響く。

「奴だ」

「間違いないのか？」

空の目が、普段の温和な物でなく、戦闘時の冷徹な物になっているのに気付いたバロンが、用心しながらイスから立ち上がる。

「……前よりもかなり力を増している。まずいな」

「ほう、そうか」

適当に相槌を打ちつつ、バロンはゆっくりと戦闘態勢を取る。

「あと三日はそこから動くなって言われなかったか？」

背を低くし、いつでも跳びかけられる姿勢になったバロンが、空を睨むように見据える。

そのうなじに波打つように獣毛が生えてきつつあるのを見た空も、手にしていた医学書を枕元に置いて全身の筋肉を緊張させていく。

「どいてくれ、行かなければならない」

「いけないな。お前を行かすとオレがここにいる意味が無くなる」

二人の間に、緊迫した空気が充満していく。

周囲の空間その物が硬質化したような時間がその場に留まり、互いに微動だにしようとしなない。

だが、バロンの視界から逃れるようにして空の手が枕の下に潜ると、そこから取り出した何かをバロンへと放り投げた。

「？」

それが何かバロンが知るよりも、空の手が宙に浮かんだそれを両手で叩く方が速かった。

バロンの眼前で音を立てて閉じられた両手が瞬時に開かれ、その間に挟まれた物―この間の折り詰めに入っていたデザートのアレンジの皮と点滴を受けた後に貼り付けられた脱脂綿―が再度宙に踊り出す。圧力によってそれは宙にその内容物を微かに振り撒いた。

「ぐっ！？」

自分の鼻を突如として襲った違和感にバロンが思わず顔を背ける。鼻腔内一杯に広がる柑橘系の芳香と、消毒用アルコールの鼻をつく匂いが野生の狼以上の能力を誇る彼の鼻を瞬時に麻痺させていく。

「そんな手に乗るか！」

目尻から涙をこぼしつつ、ベッドから脱兎の勢いで逃げ出そうとした空の腕をバロンが掴む。

だが、掴むと同時にその腕は霞のように掻き消え、空の体その物が一枚の呪符となって消えた。

「馬鹿な！？ 何時の間に！」

Baronが慌てて室内を見回し、人影が無いのを確認するとそのまま廊下へと空の姿を探して飛び出す。

慌しい足音が遠ざかっていき、室内に静寂が訪れると、それまで黙っていたダイダロスが一声鳴いた。

「上手くいきましたね」

誰もいないはずの室内に空の穏やかな声が響き、誰もいないはずのベッドから消えたはずの空が姿を現す。

「少し悪い事しましたけど………」

Baronが一番頼りにしている嗅覚を麻痺させた隙に、隠行符（気配を完全に断つて姿を隠す符）を額に貼り付けて幻術符とすり替わった空が、下半身を縛り付けているワイヤーを解いている間にダイダロスがその肩に止まる。

「さて、行きますか」

空が廊下へと飛び出し、階下に繋がるエレベーターへと走り寄る。エレベーターに入ろうとIDカードをスロットに通すが、出撃許可が降りていないため、IDが拒否されたのを見た空が他の手を考えようとした所で、突然エレベーターが開く。

「案の定か」

「兄さん………」

エレベーターの中で待っていた完全武装の陸に、空の表情が一瞬硬くなる。

が、陸は無言で一つのアタッシュケースを空へと手渡してエレベ

「ターに乗るよう促す。」

空が無言でそれを受け取り、エレベーターの中へと乗り込む。
予め行き先を押してあったのか、扉が閉まってエレベーターが動き出すのと、陸が口を開くのは同時だった。

「奴の成長は予想以上だ。今エリスと王が相手してるが、逃がさないようにするのが精一杯だろう」

「ADDL最速のエリスさんと、ADDLーの幻術使いの王さんならやられる可能性は低いでしょうが……」

空が返答しながらアタッシュケースを開くと、そこから自分の装備一式が出てきたのに微かに驚く。

「上空衛星からの観測で出された奴のオーラ量は17万、最悪さらに増える。最早普通の対応じゃ処理出来ない」

「ええ……」

手早く装備に身を固めていく空の声に緊張が走る。

「……お前の力が必要だ。空」

「ボクは最初からそのつもりですよ」

呪符の枚数を確認してジャケットのポケットと腰のパウチに戻し、
双縄& amp; #37858;の収まったホルスターを腰に巻いた空が、アタッシュケースの一番底に有った物に手を伸ばし、しばしそこで黙考する。

「議会にはすでに第二種警戒態勢を通告している。多少派手にやつても問題は無い」

「派手に、ですか」

空は手に握られた物、赤黒い色で染め上げられた柄を持った一振りの日本刀をしばし見つめた後、それをベルトの腰の後ろ部分に有る留め金にセットする。

「久しぶりのA級相手だ。遠慮してやる義理は無いしな」
「遠慮なんて、最初からしてはいませんよ」

戦闘準備を整えた空が、穏やかな、それでいて気迫の籠った声で応える。

「『LINA』、現時点を持ってADDL総員にBクラス戦闘態勢を発令。当該目標をA級M'sに認定。ジャンキー・エッジアビリティ、ガーディアン両スタッフに戦闘準備。状況いかなによつては即時出勤可能状態に」
『イエス、マスター』

『LINA』の返答に、エレベーターの到着を告げる電子音が軽やかに響いた。

「さて、派手に行くか」
「ええ」

二人の声に賛同するように、空の肩にいるダイダロスが小さく鳴いた。

扉が開くと同時に、二人は走り出す。

「レックス、現準備状況は？」
『デュポンの発進可能臨界に今到達しました！ 瑠璃香さんとマリイさんはすでに搭乗済み…今、敬一と由花ちゃんも来ました！』
「『LINA』、全サポートAIにコネクト。バトルシミュレーション

「ヨン37―13をダウンロード」
『イエス、マスター』

手早く通信で指示を出しながら、陸は格納庫へと抜ける。
その前を走っていた空がいち早くデュポンへと搭乗するのを見ながら、自らもその後続いた。

「空、ガルダの出撃準備を。上がったら直ぐに出てくれ」
「了解」

「レックス、《キサラギ》のサポート準備。いつでも撃てるようにしておけ」

「了解。整備員退避完了、リフトアップ！」

指示を出しながら陸はブリッジに駆け込み、手早く指揮席についた。

「時間が無いから手早く作戦を説明する。当該目標をA級M、ジャンキーエッジSと設定した」

「A級なんて久しぶりね」

「現状データから想定される奴の能力をシュミレートしたが、奴の能力が変位空間への潜航及び転移だとすれば、一つ矛盾が生じる」

「矛盾？」

「簡単だ。変位空間に潜れば、向こうからもこちらが見える訳が無い」

「空さん大丈夫なんですか!？」

「なんとか」

由花の心配そうな声に応え、空は通信越しに続ける。

『変位空間に潜るとなれば、完全に次元からは隔離されます。気配

くらいは分かるかも知れませんが、だとしたらあいつの攻撃の正確性の説明が出来ません』

「透視能力なんかの可能性は？」

「それなら、あたいや空が気付かない訳ないだろ？ 前に戦った時、視線は感じたけど、場所までは分かんなかったな」

敬一の問いに答えつつ、瑠璃香は首を傾げた。

「じゃあ、どうやって？」

「簡単だ。あいつの能力が空間自体への干渉だとすれば……」

「リフト地表面に到達」

言葉の途中で、レックスの報告を聞いた陸の目が鋭くなる。

「発進」

陸の号令で、デュポンの巨体が夜の闇へと飛び立った。

『空、作戦は『CAIN』にダウンロードした通りだ』
「了解」

デュポン格納庫のハッチが開いていくのを見ながら、空が超々高速戦闘機ガルーダの操縦桿を握り締める。

『あくまでこれは予想される奴の能力から導きだしたシュミレーションにしか過ぎない。最悪、全く違う可能性も有りうる』

「完璧なんて有り得ない、つてのは兄さんの口癖でしょう？」

返答の代わりに、空の耳に通信機越しの苦笑が伝わってくる。

『その通りだ。お前の役割はあくまで時間稼ぎだ。こちらの準備が整うまで生き延びろ。それが最優先だ』

「了」

『空さん！』

突然、由花の声が響く。

「なにか？」

『……あの、気をつけて……』

「ええ」

由花に心配させまいと優しく声を掛けながら、空は眼鏡を外す。そこには浄眼に冷徹な光を宿した、バトルスタッフ《イーグル・オブ・ウィンド》がいた。

「イーグル・オブ・ウィンド、出撃する」

座席の背もたれに止まっているダイダロスの泣き声と共に、通常の戦闘機を小型化したような姿を持つガルダが、夜空を切り裂いて飛び立った。

夜の公園を照らす役割を持っていた街灯が、斜めに切断されて地面へと滑り落ちる。

「はずれ」

『くそがああ！！』

王の馬鹿にした声と、《ジャンキー・エッジ》の怒声が同じように虚空から響き、刃の腕と髪が相手の姿を求めて無茶苦茶に振り回される。

「フウアアアア！！」

虚空から出現した一瞬を逃さず、エリスの牙がジャンキー・エッジの腕を噛み千切り、エリスの爪が刃の髪を千切り飛ばす。

『このネコモドキが！！』

エリスを狙って無数の刃が繰り出されるが、瞬時にしてエリスの姿は霞み、瞬間移動にも思える位のスピードでその攻撃を掻い潜る。

『逃げるか！ この卑怯者が！』

「てめえが言える筋合いかい？」

背後の建物から漏れる光で出来ている植え込みの影の中から頭だけ出した王が低く笑う。

『そこかあっ！』

「お？」

地面をえぐり飛ばしながら振るわれた刃の腕が、王の首を切断して首を虚空へと舞わせる。

「痛いじゃねえか、オイ」

宙を飛んだはずの首が文句を言いながら、地面へと転げ落ち、その首をエリスが咥え上げる。

「オレが言われた命令はあの嬢ちゃんのガードと、お前を逃がさないようにする事。お前はまんまと罠にはまったって訳だ」
『うるせえ！』

奇怪な喋る生首に向けて全方向から刃の髪が襲い掛かり、エリスごと王の生首を貫くが、次の瞬間に二つとも破裂してただの煙と化する。

『またか！？』

「だから言っただろ。逃がさないようにするだけだつて。オレは痛いのと面倒なのはゴメンなんだよ。化け物だつて金より命が大事だろ？」

『ふざけるなああー！』

出たら目に振り回される刃が、致死性の暴風雨と化して公園にある物全てを切り裂いていく。

「キャウ！」

「エリス！」

その内の幾つかを、かわしきれなかったエリスをかすめた。

『そこか！』

「ちっ！」

一瞬動きが鈍ったエリスに攻撃が集中し、それを守るように無数の棍が彼女の周囲を囲んで刃を防ぐ。

「こいつに怪我させると、家で一番凶暴な奴に怒られるんでな。悪

いがそろそろおいとまさせてもらっぜ」

『させるか、死ね！』

「分からねえのか？ オレの仕事は終わってんだよ」

「救急如律令！ 勅！」

王の声に、別の声の呪文が重なる。

上空から飛来した無数の双縄標が、その刃に呪符を突き刺したまま虚空を切り裂いて降り注ぎ、そして呪文と同時に呪符が全て同時に爆発する。

『こいつはあ！』

空中に出現していた刃の髪と腕が、呪符の爆発に巻き込まれる。爆炎と肉片が舞い散る中、一つの人影が上空から舞い降りる。

「大丈夫か」

エリスを背後に匿いながら、舞い降りた人物―空がワイヤーを操って双縄標を手元に戻す。

「うん、大丈夫」

「悪いが、後は任せたぜ」

ちょうど上空から自動操縦で降りてきたガルーダのコクピットに、影から姿を現した王がエリスを抱えて中へと潜り込む。

「『CAIN』、二人を連れて本部に退避」

『了解』

サポートAI『CAIN』が無感情な声で返答を返し、そのまま

再度上空へと舞い上がっていく。

『久しぶりだなあ、あんちゃんよお……………』
「……………」

虚空から響く声に空は無言で構える。

『傷はもういいのかい？ 確かめてやるぜ！』
「八門の法を持ちて基を拒む！」

空の手が素早く呪符を無数に取り出して八方に浮かべ、瞬時に形成された障壁に無数の刃が突き刺さる。

『下がお留守だぜ！』

その障壁を無視するかのように、空の真下の地面から突然刃の腕が突き出される。

前に戦った時よりも遥かに長大に成長した刃が、空の腹に突き刺さり、背中へと貫ける。

『へっ！』

ジャンキーエッジが密かに頬を歪ませた瞬間、刃に貫かれていた空の体が霞のように消え去り、代わりに一枚の呪符が刃に貫かれて四散した。

『！？』

そこへ、どこからともなく無数の双縄標が飛来し、獲物を見失った刃の腕に次々と突き刺さる。

「氷氣を持ちて在を禁ず！ 急々如律令！」

口訣と同時に双縄&a m p ; # 3 7 8 5 8 ; に縫い止められていた呪符が次々と発動し、刃の腕が瞬時に呪符が変じた氷によって封じられた。

『なにっ！？』

慌てて腕を再び空間の狭間に戻そうとしたジャンキーエッジは、その腕が予想以上に重くなっている事に気付き、そこでようやく空の狙いに気付いた。

『腕一本くらい使えなくしたくらいで、いい気になるんじゃないぞ！』

「そう思うか？」

闇の中からゆらりと姿を現した空の片手に、双縄標のワイヤーが握られている。

「これはお前に続いている」

それが自らの腕に突き刺さったまま氷でさらに固定された双縄標の物だとジャンキーエッジが悟った時には、空の空いた手が無数の呪符をワイヤーに叩きつけていた。

「雷氣を持ちて汝が在を禁ず！」

呪符から変じた雷が、ワイヤーを伝ってジャンキーエッジの腕に、さらにそれを伝ってジャンキーエッジの本体に流れ込んだ。

『ぐぎゃああああ！』

「ぐっ……………」

余剰分の雷が自らに流れ込んでくるのも構わず、空はワイヤーから手を離そうとしない。

『うがああああ！』

奇怪な声と共に、突然ワイヤーが緩む。それに続いて、虚空から突き刺さった双縄標ごと切り落とされた腕が出現し、地面へと落ちた。

『このクソがつ！！　くたばりやがれええ！』

虚空から雷の残滓と焦げた匂いをまとった刃の髪が、空の全方位から一斉に襲い掛かった。

「八門の…」

呪符を取り出しながら空が口訣を唱えるよりも早く、おびただしい数の刃の髪が空を襲う。

しかし、それらは空を貫く寸前で何かによって切り刻まれ、千切れ飛んだ。

「無茶しすぎよ」

「余裕を持つて対処出来る相手じゃない」

宙から降ってきた声に、空は悪びれもせず応える。

空の頭上、宙に浮かんでいるマリーが、ため息をつきながら、風

の精霊の力をさらに強める。

空の周囲で小型、高密度の竜巻の障壁と化していた風の精霊が、その範囲をさらに広げていき、その風に煽られた周囲の植え込みや街灯が軒並み引き抜かれ、宙へと舞っていく。

『何のつもりだ！ このアマツ！』

「こちらで特設リングを用意してるの、全力で行くわよ！！」

（風よ！ 風よ！ 激しく吹き荒ぶ風よ！ 力を！）

力を強めていくマリーの周囲で、まるでその風を無視するかのように淡い蛍のような光が彼女の周囲に一つ、また一つと現れ、マリーと戯れるように回り始める。

『なんだこんな風！』

最早本物の竜巻と化していく風を貫くように、巨大な剣と化した刃の腕の一本が弾丸のごとき勢いでマリーを狙う。

しかし、その刃がマリーの周囲の光の一つに触れた途端、その光は炎と化して刃の腕を焼いた。

『がっ！？』

突然の事にジャンキーエッジが思わず腕を止めるが、虚空に出現したままの腕に光が次々と襲い掛かる。

一つは小さな水の弾丸となって肉を穿ち、一つは石の刃となって刃を砕こうとし、一つは旋風と化して腕を捕らえようとする。

「無駄よ、この子達が守ってくれるから」

マリーが光の一つを手にとって微笑む。

その光、正確には光の形を取って現れた無数の精霊が、マリーの周りでダンスを踊るかのように回り続ける。

「言っただしょ、全力で行くって」

精霊達の光の一部が、マリーの背後で何かをなぞるように集っていく。そしてそれは、マリーの背中に生える半透明の力ゲロウを思わせる羽根を浮かび上がらせた。

『！ てめえも化け物か！』

「半分ね。けど、あなたと一緒にされたくはないわ！」

マリーの周囲を舞っていた精霊達が、一斉に竜巻の中へと舞い散る。

それらが全てあるべき姿、土や火へと姿を変じていき、土石流や業火の混じった凶悪な竜巻が空間を荒れ狂う。

『そんなもん、出ていかなきゃなんの意味もねえな！』

「……………そう思う？」

マリーの顔に、怪しげな微笑が浮かぶ。

その時、マリーの更に上空から甲高い猛禽類の泣き声が響いた。

『空間歪曲場測定終了！ 観察点特定出来ました！』

火、水、土の混じった竜巻が、空間の不自然な歪み、正確には空間を湾曲させて作り出されたレンズを克明に浮かび上がらせる。

「なるほど、覗きながらシテたって訳か」

「空間の歪みに潜めば、向こうからもこちらが見える訳ないからな」

光学迷彩を施して上空に待機していたデュポンの乗降ハッチから、瑠璃香は空間歪曲レンズが繋ぐ先、ジャンキーエッジの目が浮かぶ一点に向かってG・ホルグを構える。

「アーメン！」

呪文と共に、瑠璃香の力を込めた純銀の退魔用弾丸は、竜巻から逃れるために風の及ばない範囲に移動していた相手の隻眼を、正確に撃ち抜いた。

『ぎいやあああああ！！』

虚空を、凄まじいまでの絶叫が満たす。

『目が、オレの目があー！！』
「そこか」

ジャンキーエッジの絶叫が響く中、竜巻の中心で結界を張りつつ、浄眼で周囲を観察していた空が、浄眼で空間の揺らぎを捕らえると、腰のパウチから取り出した呪符を、結界から外へと投じる。

「天后、貴人、青竜、六合、勾陳、朱雀、騰蛇、大常、太陰、天空、玄武！ 我、十二神の助を得、八門の法を持ちて遁行を解かん！
急々如律令！」

風に舞って上空へと舞った呪符が、空の口訣に応じて力を放ち、光り輝きながら風に乗って旋回を続ける。

そして、呪符が一際強く輝いたかと思うと、まるではめ込まれたジグソーパズルを外すがごとく、空間の一部が剥がれ落ちる。

「見えたあ！」

その一瞬をデュポンの格納部ハッチから待っていた敬一が、そこから一気に飛び降りながら、手にした刀を大上段に構えた。

「光背一刀流《雷光斬》！」

敬一の白刃が、剥がれ落ちた空間の歪みに潜り込み、そこから一気に空間その物を両断する。

一瞬、剥がれ落ちた歪みを基点として空間に一本の線が走り、次の瞬間には空間その物がガラスのように碎け落ちた。
そして、その中に、それはいた。

「目え！！ オレの目えー！！」

雷を伴った暗雲を思わせる奇怪な色合いで満たされた空間の中に、それはいた。

「うわっ……………」

腰のベルトに装着された降下用特殊伸縮繊維が落下の勢いを完全に殺した所で自動的に外れ、地面に降り立つと同時にそれを一番間近で見てしまった敬一は思わずうめきを漏らす。

「ここまで成長していたのか……………」

あまりに異様なその姿に、空は低く眩く。
それは、前に見たよりも遥かに巨大な肉の塊だった。

「痛い！ 見えねえ！ どこだあああああ！」

奇怪な肉塊の小山の胴体から無数の刃の触手が伸び、その上に立つ肉の搭からは何本もの刃の腕が蠢いている。

「ちくしょう！ 殺す！ 皆殺しだあ！」

肉の搭の中心に、それだけは人のままの顔が埋め込まれており、その隻眼から血がとめどなく溢れ出してきていた。

「殺す！ ころす！ コロスウウウー！」

その奇怪な姿をさらけ出したジャンキーエッジの腕の一つが、突然無造作に自分の体を切り裂く。

「なんだ？」

「あれは！」

切り裂かれた体の内部から、大量の注射器や粉末が出てきたのを見た陸が、それが何かを一瞬にして気付いた。

「コロスウウウウー！！！」

ジャンキーエッジは自分の体内から取り出したそれ、末端価格測定不能の膨大な麻薬を、自らの体に次々と注射し、また自らを傷付けてそこに流し込んでいく。

「マリー！」

「了解！」

陸の言わんとする事を察したマリーが、竜巻を一点に収束、四台元素で構成された巨大な槍と化して、ジャンキーエッジへと繰り出す。

数多の精霊で構成された槍は、巨大なドリルとなって肉の小山を大きく穿つ。

「コオオオオロオオオオスウウウー!!」

だが、体の三分の一近くが挟られながらも、ジャンキーエッジは空間の狭間から身を乗り出すように顔の埋め込まれた肉の搭を前へと倒れ込ませる。

そして、それに続くかのように挟られた断面から血と肉を撒き散らしながら肉の小山がそれ自体が蠢き、そしてそれは肉その物が内部からせりだし、また収まっていく事を繰り返す奇怪な肉のキヤタピラとなって次元の狭間からその身をせり出してくる。

「我が守護天使ハナエルよ！ 汝が御手に掲げし聖銃の雷火、我が前に撃ち放たん事を！」

「オン インダラヤ ソワカ！」

（土よ、水よ、力を！）

「オン アビラウンケン、召鬼顕現！」

「夏気を持ちて火気と成し、火気を持ちて汝が在を禁ず！ 急々如律令！」

瑠璃香の《ハナエルの銃火》の術が、

陸の《雷帝インドラ》の力を込めて投じられた独鉈杵が、

マリーが地面から呼び出した土の槍と崩壊しかかった水道から呼び出した水の渦が、

敬一の召還した式神が

空の火気の禁呪とが一斉にジャンキーエッジへと襲い掛かる。

「死！ し！ シ！ 死死死死ししししシシシシイイネエ
エエエ！！」

次元の狭間から出ようとするジャンキーエッジの全身を攻撃が覆い尽くすが、それにかまわず、最早完全に正気を失った声で喚き散らしながら刃の触手と刃の腕が出たら目に繰り出される。

「キャアア！」

「おわっ！」

「くっ！」

空間内を縦横かつ出たら目に繰り出される刃の嵐に、マリーが宙を舞いながらそれをかわし続け、敬一は必死に手にした刀を振るってそれを叩き落し、空は口訣を唱える暇すら見出せぬため、護身符をばら撒いて攻撃を防ぎつつ、驚異的な速度で防ぎ切れない刃を見切ってかわしていく。

「完全にキレやがった！」

「『LINE』！ 全武装をBレベルオートガード！ 下の三人のサポートを最優先！」

『イエス、マスター』

空間を縫うように渡りつつ届いてくる刃に、瑠璃香がG・ホルグを連射してそれに応戦し、陸は舌打ちしつつ次に取るべき手段を無数に脳内で考える。

「そ、そ、そそそそこおおお！」

不気味な声で喚きながら、ジャンキーエッジは刃の腕を大きく振

りかぶる。

そして、そこから千切れた刃が巨大なブーメランとなって上空の瑠璃香と陸に襲い掛かってくる。

「なっ！」

「そう来るか！」

正面から飛んできた血肉のこびりついた奇怪なブーメランを陸は錫杖戟を振るって叩き落すが、他のブーメランの何割かはデュポンの機銃に阻まれ、防ぎ切れない物はデュポンの表面装甲へと突き刺さる。

「見えてねえんじやなかったのか！？」

「ドラッグのフラッシュオーバーで異常鋭敏化した聴覚か、お前と同じ直感のどっちかだ！ まだ来るぞ！」

「いいいいる、いいルルるルル！！」

刃が千切れた腕から、更なる刃が生えてくる。それをまた投じると、さらに刃が生える。生え変わる度に、刃は長く、禍禍しい形へと変化していった。

「ダメだ！ 防ぎきれねえ！」

「こっちも限界！」

「もう持ちませ、ぐっ！」

「敬一！」

「……………」

バトルスタッフ全員の悲鳴を聞きながら、陸は脳内で無数の手段をシュミレートしていく。

「レックス！ 《キサラギ》からダイレクトサポート！ 由花！
デカイのが来るからその後を見てくれ！」

『了解！』

『は、はい！』

「は、はい！」

デュポンのブリッジから、ヘッドマウントディスプレイ越しに壮絶な激闘を呆然と見ていた由花が、陸の一言で慌てて未来を見ようと精神を集中させる。

「きっかり15秒後、上空^{キサラギ}衛星から衛星砲を発射するから」
「分かりました」

レックスからの指示を聞きながら、由花の視界にもう一つの視界が広がっていった。

最初に見えたのは眩いばかりの光だった。

それが晴れると、もうもつたる土煙が周囲を覆う。

そこで、空がためらいもなくその土煙の中核へと突進してトドメをさそうとし……土煙から繰り出されたとんでもなく巨大な刃が、空の胸を、貫いた。

「！！！？？」

「座標固定終了。エネルギー転化OK」

「まっ……」

「発射！」

由花の声より一瞬早く、レックスの指はエンターキーを押し、由花の声は直後の轟音にかき消されていった……………

「来るぞ！」

陸の声と同時に、上空から眩い光の柱が落ちてきた。

有事に備えてチャージ状態で待機していた上空衛星^{キサラギ}から発射された高精度狙撃レーザー砲が、寸分の狂いもなく、ジャンキーエッジの体をレーザーで覆い尽くす。

「きゃあ……」

「うわああ……」

「くっ……」

砲撃の余波が周囲に荒れ狂う中、空の浄眼だけが、目を反らさずに相手を見続ける。

「やったか！？」

「まだだ！」

レーザーのイオン臭と、肉の焦げる嫌な匂いが立ち込める中、空の浄眼は土煙の中にいまだ残る敵を捕らえていた。

「我、雷気を持ちて……」

『駄目ええええええ！！』

トドメを刺そうとした空の耳に、通信機から響く由花の絶叫が飛び込む。

刹那、土煙の中から今までとは比べ物にならない巨大な刃が、弾丸のような勢いで空の胸へと向けて飛んできた。

「!!」

切っ先が空の胸に突き刺さろうとする瞬間、由花はおもわず目を閉じた。

だが、HMDに内臓されたスピーカーから、鋭い金属音が響いてきた事に疑問を感じ、恐る恐る目を開く。

そこには、見えた未来と違い、いつの間にか腰の後ろから抜いた日本刀で、その巨大な刃を受け止めている空の姿があった。

「はず……れた？」

今まで能力で見えた未来と、実際の未来が食い違った事など無かったはず、と由花は自問する。

最悪の未来が来なかった事を、安堵する暇も無く、由花の全身を強烈な不快感を襲った。

「な……うつ!？」

不快感と共に猛烈な悪寒、嘔吐感が一遍に由花を襲う。

『あの馬鹿、抜きやがった!』

『く、うつ……』

『主よ、我に加護を……』

『おぶっ!』

通信に、同じように不快感を堪える皆の声が響いてくる。

『妖刀《赤滅^{せきめ}》抜刀を確認。イーグル・オブ・ウィンドの生体オーラ量急速増大を確認。戦闘フィールド内属性、急激的にマイナスに移行』

『LINA』が淡々と状況を報告する。

嘔吐感を堪えて由花が改めてヘッドマウンドディスプレイに映る映像を見直した。

そこには、赤黒い色で染め上げられた柄を持ち、片刃ではなく諸刃となっている奇怪な日本刀を構えた空と、それと対峙する肉体のほとんどを吹き飛ばされ、残った体を巨大な剣その物の姿へと変じたジャンキーエッジの姿があった。

心無しか、その日本刀から何かが揺らめいているのが由花の目には見えた。

すると、由花の視界にその刀の過去が突然、見え始める。

憎悪の表情で刀を打ち続ける老刀匠。

その周囲に積み重ねられた、引き千切られ、食い千切られた無残な死体の山。

老刀匠がその死体を無造作に炉にくべ、その火で鉄を炙る。

打ち鍛え、それを今度は死体から搾り取ったらしい血に浸して焼きを入れる。

そして、また死体をくべ、鉄を炙り、打ち鍛え、血に浸し……..
やがて、その刃は、血で染め上げた柄にはめられた。

『滅ぶべし………滅ぶべし!』

老刀匠の壮絶な呪詛が聞こえた気がした所で、由花の視界が現在に戻る。

(死体で………作られた刀!?)

『由花、精神を集中させる。赤滅の妖気は能力者にはキツイぞ』
「り、了解」

陸の声に我に返った由花は、慌てて再度精神を集中させた。

「シシシシシシシシsisisisi……………」
「終わりだ」

空が壮絶な妖気を放ち続ける妖刀、《赤滅》を肩越しに構える中国拳法式の構えを取る。

「由花、サポートを」
『は、はい！』

空からの声に由花は慌てて返答する。
それを聞きながら、空は突撃を掛けた。

「しいiiiiiii！！！！」

巨大な剣となったジャンキーエッジの全身から、刃の枝が急激的に生えてきて、それ自体が刃の鋭利さを伴ったまま触手のようになつて空を襲う。

空は手にした赤滅で正面から来たそれを振り落とし、即座に手首を返して左から来た物を跳ね上げ、そのまま切っ先を下に向けて真下に突き下ろし、下から来た物を受け止める。

だが、弾かれたはずの刃の枝が突然その先端を虚空へと潜り込ませる。

『来ます！ 後頭部！』

由花の声に即座に空は赤滅を後ろに回し、そこから出現した刃を受け止める。

『右前下から、あと左から横殴りに！』

同じように空間を渡ってくる刃の出現位置を由花は指摘し、空は上に跳んで攻撃をかわし、横殴りに来た刃の腹に片手を添えて小さくトンボを切って着地する。

『真上から複数、まっすぐ下に！』

(土よ………)

真上から振ってくる刃を、マリーが土の精霊の力で地面の土から屋根を作り出し、それを阻む。

『一斉に飛ばしてきます！』

「天空に在りし大天使ミカエルよ！ 汝が盾にて我らを守らん事を！」

刃の枝自体が分裂して無数の刃となって飛び交うのを、瑠璃香の《ミカエルの盾》の術が障壁を作り出してそれらを防ぐ。

『左右同時に！』

「ふっ！」

「はあっ！」

空が中国式の柔軟な剣術で右から来た物を弾き、敬一が日本式の裂帛の居合で左から来た物を半ばから斬り飛ばす。

『正面から突っ込んできます！』

「オン マリシエイ ソワカ！」

ジャンキーエッジが自らの全身を強烈な刺突と化して突撃してくるのを、陸が摩利支天の力を込めた錫杖戟を瞬時に算出した力点に投げつけ、その軌道を大きく狂わせる。

『シシシシシ………』

「……………」

自らの脇を通り過ぎようとした巨大な剣の中央、そこに浮かんだ顔に空は無言で赤滅を突き刺す。

「しいいあああ」

「ふうふうふう」

顔面に赤滅を突き刺したまま、暴れ回るジャンキーエッジを前に、空は呼吸を通じて外気を取り入れ、内気へと変換させてそれを練り上げていく。

それに応じて、ゆらりと両手を広げ拳法の型を舞って気を最大限に高めていく。

そしてそれが最大限に達した瞬間、空は練り上げた気を右手に収束させ、それを発勁として一気に解き放った。

「はあああああ！！！」

練り上げ、高められた気が込められた掌底は、狙い変わらず赤滅の柄尻に炸裂し、そこから赤滅を通じて気は強力な滅びの力となって、一気に相手の体内に解き放たれた。

「い、ア……………」

ジャンキーエッジの全身に、無数のヒビが生じていく。

「ああああああああああ……………」

断末魔の絶叫を上げながら、ジャンキーエッジの体が無数の破片となって碎け落ちる。

煌く破片が周囲に降り注ぎ、それも地面に落ちる前に雪のように消える。

最後の一片が消えると、ただそこには地面に突き立った妖刀だけが残っていた。

『残存オーラ量、急激に消失。目標“ジャンキーエッジ”の完全消失と断定』

「……………交戦終了。現時点を持ってケース37に対する全体勢を解除する」

「だああ、疲れたああああ……………」

「まったく……………」

「もうダメ……………」

「あたいはもうけえって寝る……………」

陸の声を聞いた全員が、疲れ果てた声を上げながらその場に崩れ落ちる。

「終わった……………んですか？」

『聞いている通りだ。入隊早々ご苦労だったな』

「ご苦労さん」

陸とレックス双方の声を聞いた由花が、ゆっくりと息を吐いて全

身から力を抜いた。

酷い疲労感を感じつつ、ヘッドマウントディスプレイを外そうとした所で、ふと空が無言で立っているのが見える。

空は静かに佇みながら、墓標のように突き刺さった剣を、無言で見つめていた……………

エピローグ

「……………で、結果がこれか？」

「ええ、まあ……………」

前と同じ病室で、ベッドに横になった空がカルテを手にしたメデイカルスタッフの男性医師の微妙に震える声に、恐る恐る応える。

「外傷はたいして増えてない。増えてはいないが……………」

元軍医である事を自慢と誇りと生きがいに行っている中年の男性医師が、怒気どころか殺気と言っていい視線で空を見た。

「治りかけてた傷が全部開いているのはどういう事だ？」

「いや、そのかなり無理をしましたから」

「ほほう……………」

その場を、気まずい沈黙が流れる。

「この大馬鹿者！！！」

直後、その階全体を揺るがすかのような大怒声が響き渡った。

「かりにも自分が医者になろうとしている奴が、自分の体の管理も出来んとは何事だ!!」

「いや、あの、加減してどうにかなる相手でもなかった物で……………」
「やはり、貴様を入院させるにはこれしかないか？」

男性医師が、無言で懷から軍医時代から愛用しているベレッタM9を取り出すと、スライドを引いて空の足を狙う。

「…………冗談になってないと思うんですけど？」
「無論、冗談じゃない。戦場じゃ同じ手で何人かベッドに縛りつけた」

1gの虚偽も感じられない声と目と顔で、男性医師はトリガーに指を掛ける。

思わず空がベッドから逃げ出そうとした時、ドアからノックの音が響いた。

「ちっ」

舌打ちしながら男性医師が懷にM9を収めるのを見た空が、胸を撫で下ろしながら声を掛けた。

「どうぞ」

「失礼します」

扉が開くと、手に見舞いの品と思われる物を持った由花が、足元に猫モードのエリスを連れて病室へと入ってくる。

「空さん、傷は大丈夫ですか？」

「ええ、由花さんのお陰で」

「だが、こいつはすでに全治の見込みが無い」

「えっ……」

男性医師の声に、一瞬由花の顔が沈む。

「何せ、死ななきゃ治らない病気に掛かってるからな。しかも付ける薬も無い」

「……………あの、それは……………」

しばらく思い悩んだ後、男性医師が言わんとしている事がようやく分かった由花は、少し困った表情をしながら、室内に有ったイスに腰掛けた。

「ところで、由花さん」

「なんですか？」

「その物々しい格好は？」

空が、由花の格好、出撃時のジャケットに腰にG・ホルグまでぶら下げているのを見て首を傾げる。

「あ、陸さんから今事後処理で忙しくて人手が足りないから、エリスさんと一緒に空さんのガードに当たってくれて言われまして……」

「……………」

空が無言でその場に硬直する。

「じゃあ、お大事にな」

そのまま病室から去ろうとした男性医師が、ドアをくぐる寸前に思い出したかのように足を止めた。

「ついでに言つとくが、逃げたらその責任は彼女に行くからな」
「ちよつと…」

そういう手が有ったか、という呟きと共に、ドアが閉まる。
後には、硬直した空と見舞いの品を広げる由花、そして早くもうたた寝に入ろうとしているエリス（猫モード）が残された。

「お店から、空さんのいつものメニュー持って来ましたが、食べます？」

「あゝ……………いただきます」

しばし放心していた空が、由花が差し出してきたココアとパイをおとなしく受け取る。

「傷の方、本当に大丈夫ですか？ 一週間は絶対安静って聞いたんですけど……………」

「大丈夫ですよ。これくらい、いつもの事ですから」

「あの、それで……………その、陸さんからその間、学校が終わったらここでガード任務に付いてくれて言われてまして……………」

赤面しながらの由花の小さな声に、空は今までで最大級の難関に、内心頭を抱え込んだ。

2029年9月26日

忙しい日々がようやく終わった。

いや、正確にはこれから始まるのだ。

でも、もう迷わない。

自分の力で、自分に出来る事を精一杯やっていこうと思う。

これからが、私の本当の人生の始まりなのだから……………

E
N
D

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2991a/>

オーガゲートキーパーズ CASE 1 MEETING

2010年11月13日22時02分発行